

# 佐野遺跡XII

——県道拡幅と水路工事に伴う発掘調査報告書——

2010年2月

北信建設事務所  
山ノ内町教育委員会

# 佐野遺跡XII

——県道拡幅と水路工事に伴う発掘調査報告書——

2010年2月

北信建設事務所  
山ノ内町教育委員会

## 序 文

佐野遺跡は、山ノ内盆地の南西部扇状地に立地する縄文時代晩期の集落跡である。中部山地における数少ない遺跡であり、東北地方の核のある亀ヶ岡文化圏などの影響のみられる遺物が豊富に出土し、昭和33年に初めて発掘調査が実施されました。

その際発見された縄文晩期の、中部山地で成立した特色を示す土器に対して、永峯光一氏は「佐野式」と型式を命名された。そして昭和51年には国の史跡に指定されました。

過去に11回の発掘調査を実施し、多数の遺物が発見され、縄文晩期の文化系統や、縄文人の交流を解明する重要な資料が、確認されております。

今回の発掘調査は、県道宮村湯田中停車場線道路拡幅改良と排水のU字溝埋設工事に伴い山ノ内教育委員会が北信建設事務所より受託し、平成21年8月から平成22年2月にかけて発掘調査と整理作業を実施したものであります。その結果、794点の遺物等が発見され、新知見の土器などが検出できました。

この発掘調査にご指導をいただき、調査報告書をまとめていただきました、檀原長則氏をはじめ、労務と整理作業に長期間にわたり大変ご苦勞いただきました、(社)中野広域シルバー人材センター、北信建設事務所、工事施工業者、近隣の皆様など、ご協力をいただいた多くの関係者のみなさまに深甚なる感謝を申し上げ、序文といたします。

平成22年2月

山ノ内町教育委員会

教育長 青木 大 一 郎

## 例 言

- 1 本書は、山ノ内町大字佐野に所在する国指定史跡佐野遺跡の第12次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成21年8月20日から9月24日にわたって行った。
- 3 本調査は県道 宮村（高山村）～湯田中（山ノ内町）停車場線の拡幅と排水路工事に伴い、山ノ内町教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査は重機を用いて遺物包含層に達するまで除去した。また発掘深度は-80cmまでした。
- 5 山ノ内町南小学校校庭の造成工事や、県道の諸々の付帯工事のため攪乱を受けた箇所があった。さらに交通が頻繁のため、施工業者と協力して安全対策も配慮した。
- 6 出土遺物の注記は、従来の形式を継承し、「YS12次・調査地点名」とした。
- 7 本報告の執筆は、檀原長則、橋内賢裕が行った。
- 8 整理作業は、山ノ内町役場及び、中野広域シルバー人材センターで行い、遺物、実測、トレースは、橋内賢裕、土屋直美、竹田保夫が行った。
- 9 長野県教育委員会、事務局、文化財・生涯学習課の寺内隆夫氏に発掘調査の指導をいただいた。中野市博物館、中島庄一氏と中野広域シルバー人材センターに御配慮をいただいた。
- 10 本遺跡の出土遺物、遺構図、写真等は山ノ内町教育委員会が保管している。

## 目 次

序文	
山ノ内町教育委員会 教育長 青木大一郎	
例言	
第I章 経 過	1
第1節 発掘調査前の経過	1
1 経過	1
2 調査団等の構成	1
第2節 発掘調査の経過	1
1 発掘調査日誌	1
2 整理作業	2
3 今回の遺跡調査について	3
第II章 遺 跡	6
第1節 A地点	6
第2節 B地点	6
第3節 佐野遺跡公園の樹木	8
第4節 現在の佐野遺跡周辺の 動植物について	8
第III章 遺 物	12
第1節 縄文時代	12
1 晩期土器	12
2 主な出土土器について	12
3 土器底部圧痕	14
4 石器の観察表	14
第2節 平安時代以降の遺物	15
第IV章 結 び	25

## 挿図版目次

第1図 遺跡の位置(1)	3
第2図 遺跡の範囲	3
第3図 遺跡の位置(2)	4
第4図 調査グリット及び遺物出土範囲	5
第5図 集石位置図	7
第6図 縄文晩期土器(1)	16
第7図 縄文晩期土器(2)	17
第8図 縄文晩期土器(3)	18
第9図 縄文晩期土器(4)	19
第10図 縄文晩期土器・底部の圧痕(5)	20
第11図 石器	21

## 挿表目次

第1表 土器底部圧痕	14
第2表 石器の観察表	14
第3表 土器の観察と遺物の出土グリット表	22

## 写真図版目次

図版1 土器(1)	
図版2 土器(2)	
図版3 土器(3)	
図版4 土器(4)	
図版5 石器	

# 第 I 章 経 過

## 第 1 節 発掘調査前の経過

### 1 経 過

平成 21 年 2 月 3 日 長野県庁において、長野県教育委員会 北信建設事務所（当時中野建設事務所） 山ノ内町教育委員会の三者で、県道宮村湯田中停車場線道路改良工事に係る埋蔵文化財等の保護協議が行われる。

平成 21 年 4 月 21 日 長野県北信建設事務所から、県道宮村湯田中停車場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘について長野県教育委員会あて通知がある。

平成 21 年 5 月 7 日 長野県教育委員会から、発掘調査を実施するよう通知がある。

平成 21 年 8 月 20 日 委託者 長野県北信建設事務所長と受託者 山ノ内町長の両者で、佐野遺跡の発掘調査委託契約を締結する。（委託期間は契約日（H21.8.20）から平成 22 年 2 月 28 日）

### 2 調査員等の構成

調査責任者 青木大一郎 山ノ内町教育委員会教育長

調査員 檀原 長則 日本考古学協会会員、山ノ内町文化財保護審議会委員

調査補助員 橋内 賢裕

調査指導者 寺内 隆夫 長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課

調査担当係 竹節 拓幸 山ノ内町教育委員会  
調査作業員

村上 治 武田 衛 下田常右衛門

鈴木 金三 黒岩 哲彦 三浦 吉郎

小林 資政

整理作業

橋内 賢裕 土屋 直美 竹田 保夫

協 力

(社)中野広域シルバー人材センター

## 事 務 局

山ノ内町教育委員会事務局

吉池 茂敏 教育次長

須田 紀弘 生涯学習体育係長

竹節 拓幸 生涯学習体育係

## 発掘調査の経過

平成 21 年 8 月 7 日（金） 午前、山ノ内町教育委員会で佐野遺跡発掘調査打ち合わせ。

### 参集者

長野県北信建設事務所	児玉慎一郎
	小林 信也
施工業者木島平村（有）小松建設	大塚 一樹
山ノ内町教育委員会 教育次長	吉池 茂敏
生涯学習体育係長	須田 紀弘
生涯学習体育係	竹節 拓幸
調査担当者	檀原 長則

## 第 2 節 発掘調査の経過

### 1 発掘調査日誌

8 月 20（木）、21 日（金） 木島平村、小松建設のバック・ホーにより、山ノ内町南小学校グラウンド側（北方）A 地点より表土剥ぎを行う。

8 月 24 日（月） 黒土層の厚さ約 30cm。もとは畑とみられる。黒色土器杯底部あり、磨滅していた。

テント設営、グラウンドへの登り口に、石組あり。グラウンドの道路側排水用ヒューム管あり。電柱移動のためグラウンド側を A 地点、遺跡側を B 地点とする。

8 月 25 日（火）A 地点 SP トレンチ、上層より黄黒色土、黒色土、小礫層、黄砂礫層、ローム層は無し、グリット設定、黒曜石片 3、土器片。

8 月 26 日（水） 南へ拡張、黒曜石片やや大出土、土器底部出土、下層石列層。

8 月 27 日（木）A 地点 A-6～A-7 間半円形に並んだ石列、壺型土器上部出土。

8 月 28 日（金）グラウンド側の埋積土は石礫、黄色土。掘り下げ、石礫あり。道路側は攪乱、下層まで及ぶ。土器片散発的に出土。午後、県教委、寺内氏指導、建設事務所小林氏、町教委、須田氏、竹節氏。

8 月 31 日（月）I 地点中央、石礫群。南方叩きのように締まり、砂あり、約 30cm 角の平石あり、土器片は少なし。平石は中近世の住居址の疑いもあり。

9 月 1 日（火）平石から南、茶褐色土の下礫多し、土器片、散発的に出土。黒曜石片もあり。

9月2日(水) 午前中のみ発掘。  
 9月3日(木) A地点、清掃。A地点全体写真、平面図。  
 9月4日(金) A地点の配石状遺構、写真、実測図。道路面上より-78cmまで掘る。土器片、数片あり。  
 9月9日(水) B地点遺跡公園西側、土塁より道路へU字溝埋没のため幅130cm、排土立ち会い。道路面から深さ60cm、黒土層、土器確認、掘削深度は-80cmまでの指導である。発掘する深さは約20cmとなる。  
 9月10日(木) B地点の発掘  
 9月11日(金) B地点、南、JA駐車場西の部分は遺物なし。遺跡公園側の石列は、もとの畑の境界石かと思われる。その内側に1回目の配湯管があり(土塁の裾部分。現在は集落下水道排水管と同一箇所)。その遺跡面は上から黒色土、茶褐色の石礫層(不整合)、黒色土(均一層・遺物包含層)、茶褐色土(地山)となっていた。舗装面から-65cm土器多数出土。攪乱は受けておらず、昭和33年発掘面から西方へ傾斜して存在した。寺内氏、建設事務所2名山ノ内教委、教育長以下4名来訪。  
 9月14日(月) B地点の南半分の清掃作業、写真、小型有柄鍬、剥片、土器片などが出土。中央部の未発掘部分の電柱建て替え作業。  
 9月15日(火) B地点A'-4付近、土器片多し、その北側に攪乱部分あり。道路側は石礫で埋まる。道路面下-68cmに口縁に刺突がある、細い縄文を施した土器片あり。A'-3中央西に沈線のある土器片展開。層序、舗装10cm、碎石50cm、以下、黒色土(遺物包含層)、下層は石礫多い黄色土層となる。  
 9月16日(水) B地点A'-4、中央、土器集中出土、土器片展開4ヶ所。B地点A'-2から三叉文と口縁帯内側に文様のある土器片出土。B'-6東側にも土器片展開。  
 9月24日(木) A・B地点中間の電柱移転跡の発掘。石鍬、土器片などあり。A地点の石礫群は、南へ続くとみられるが破壊されていた。また旧温泉パイプで破壊された部分もあった。写真、実測図。本日で現場作業終了。

## 2 整理作業

9月30日(水) 竹節、椀原、橋内、土器洗いの器具などの手配、刷毛、ゴム手袋、タライ、カゴ、ザルなど。  
 10月5~9日、山ノ内町役場で遺物洗い。  
 10月13日遺物を袋に入れて中野市中央、中野市広域シルバー人材センターへ運ぶ。  
 10月15日から遺物の注記作業を始め、遺物実測、修復、拓本、原稿執筆を行い、〇月〇日、終了し、〇月〇日原稿入稿、校正、遺物および記録の残務整理を行った。  
 その後、遺物、記録資料は、山ノ内町教育委員会に移管した。

## 3 今回の遺跡調査について

今回の発掘調査は、宮村(高山村)~湯田中停車場線の拡張と、排水路埋設工事に伴うものである。道路拡張と水路新設や国史跡指定地の保存

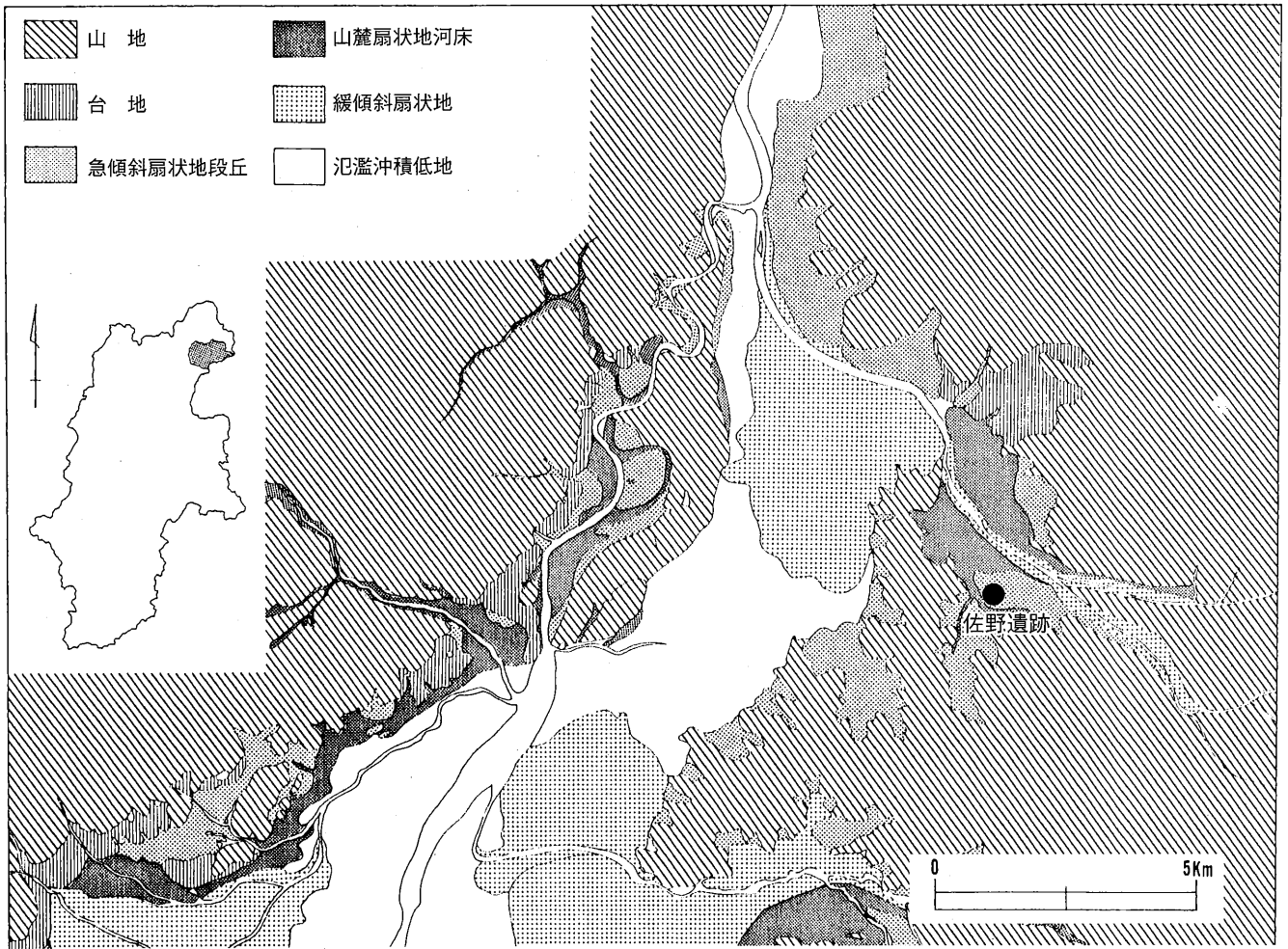
と、北三沢川までの交通の利便の両立を図るための、地元の要望がなかなか実現せず、ようやく実現したものである。

さて、実際に発掘してみると、調査幅の広がったA地点は、山ノ内町南小学校の校庭の度重なる拡張によって、埋め立てが行われていた。また、南からくる児童の登校口の施設もあり、さらに校庭の雨水排水のヒューム管理設が行われていた。さらに道路側、JA志賀高原の元給油所、農機具修理工場は、埋立によって造成されたとみられ、それに向かって傾斜があり、埋立土がかなり下層まであり、攪乱をうけていた。そして、土器片などがまばらに出土した。地山上の石礫は多く、組石と判定するのに困難で、数例を呈示するにとどめた。

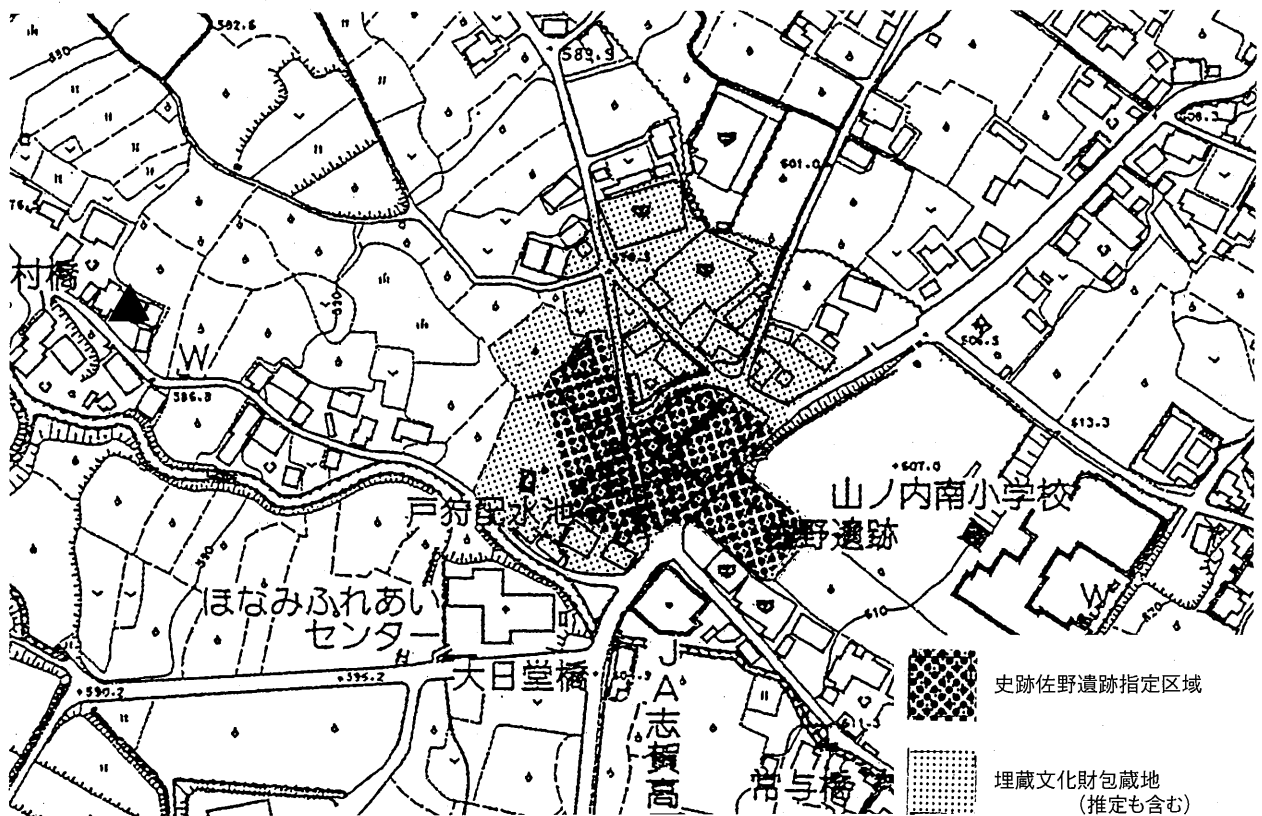
A地点と、B地点の間にも遺物包含層が、攪乱をうけた部分があったが、国指定遺跡に接する部分は、やはり、遺物の出土が濃厚であった。しかし、U字溝の埋設工事の必要面積の調査幅約130cm、深さ-80cmと調査面積が制約されていたので、遺構の究明には至らなかった。B地点の出土遺物は、昭和33、34年(1959)に行われた発掘調査の遺物と共通するものがあると期待された。また、工事発注者 北信建設事務所、工事業者(有)小松建設の全面的な協力があつたが、工期、交通問題があり、充分意をつくせなかつた面もあつた。



調査前の風景

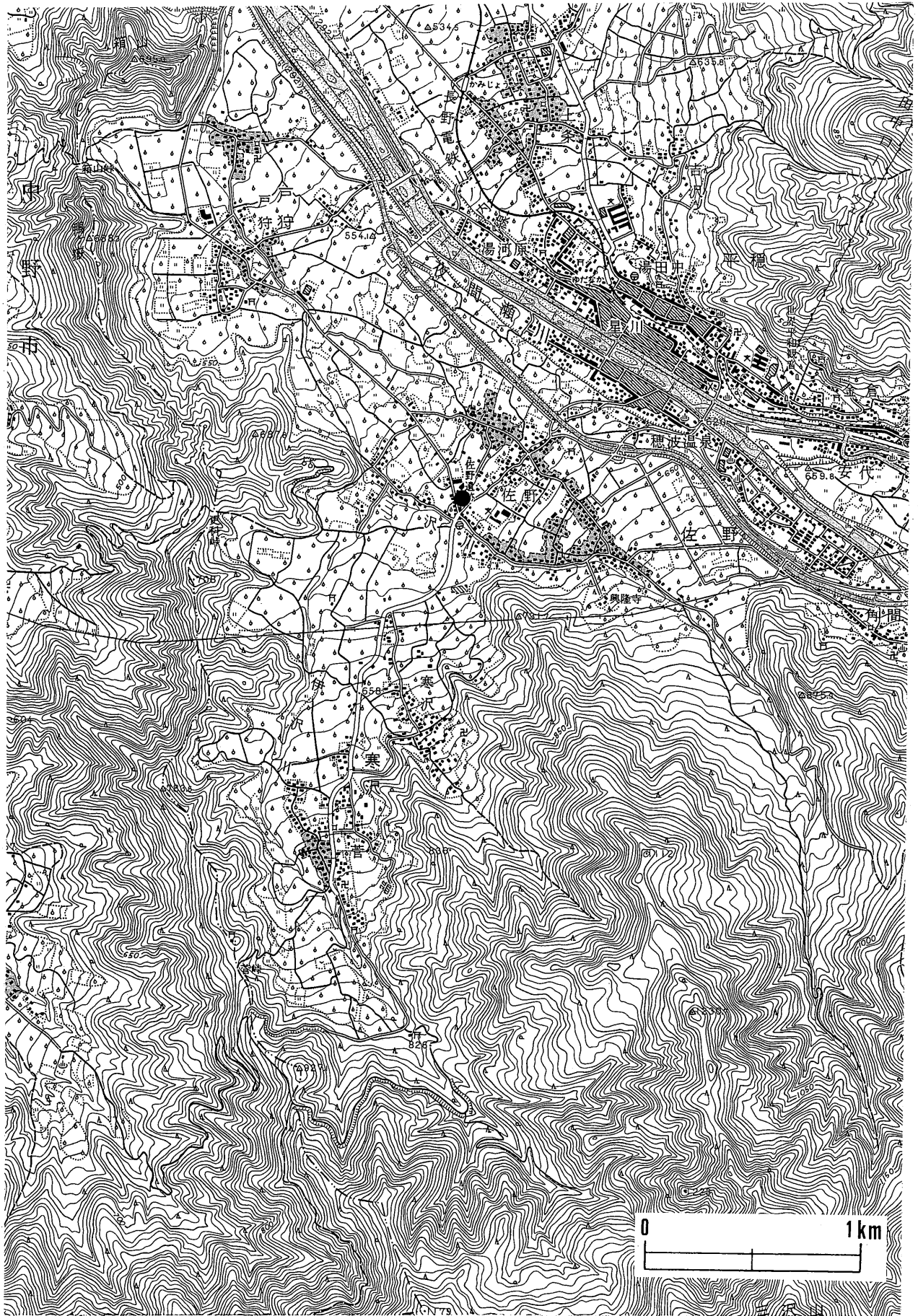


第1図 遺跡の位置(1)

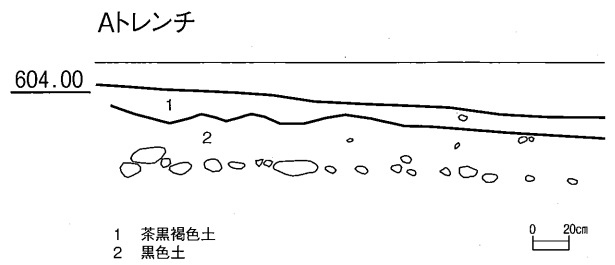
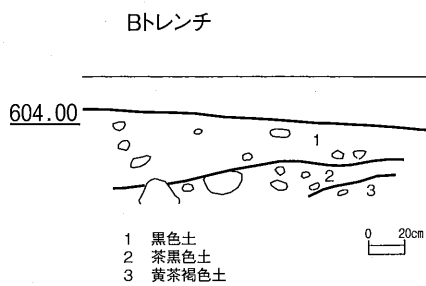
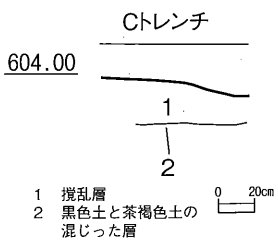
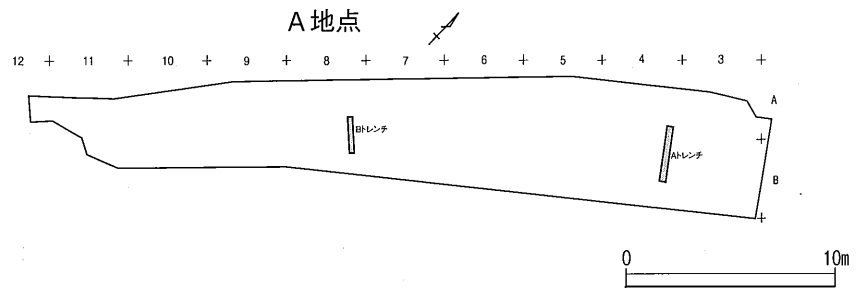
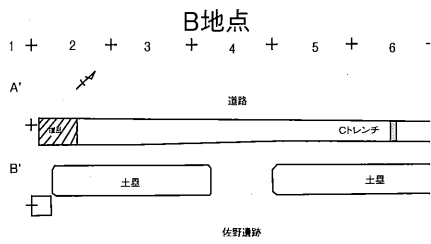
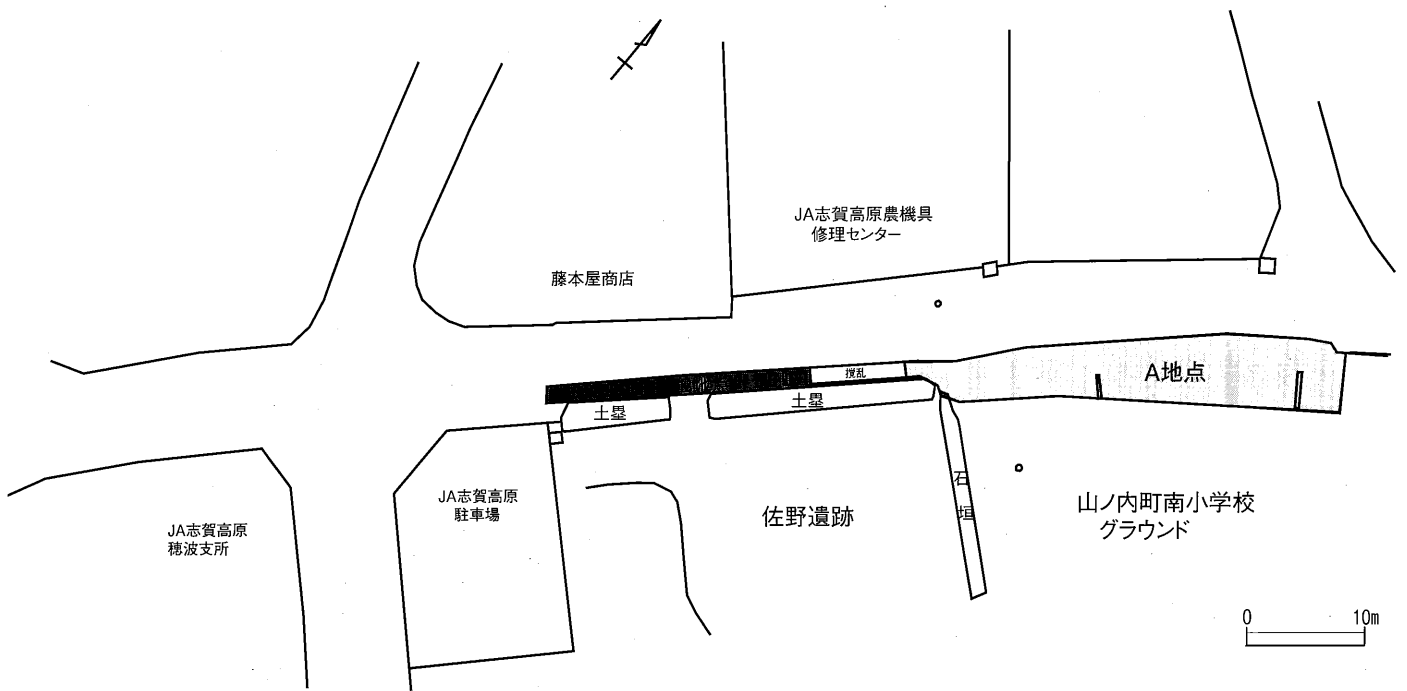


第2図 遺跡の範囲





第3図 遺跡の位置(2)



第4図 調査グリッド及び遺物出土範囲

## 第Ⅱ章 遺 跡

※遺跡の位置と立地、※地層の概説は前回調査報告書『佐野遺跡X I』参照

### 第1節 A 地点

A 地点は西は道路、東は山ノ内町南小学校の校庭に面し、道路に沿って延び、幅は北方約7m、南で約3.5mであった。

覆土は北ほど多かったが、先述のごとく上は攪乱をうけており、保存が期待された校庭側も従来からの覆土（耕作土？）も失われていた部分が多かった。

覆土を除くと石礫が広がっており、土器片が散発的に検出された。特に集中してみられる所はなく、南の遺跡公園側が、量的に多かった程度である。

特に人為的かと推定した集石は、5箇の4箇所であったが、土器などの埋設や集中は認められなかった。直径30cmの平石が集石1と4にみられる。特に4に接続する平石は、よく据わっており、例えば粗い布を柔らかにするための台石かとも思われた。

### 第2節 B 地点

B 地点は遺跡公園西側の、土塁に沿って埋設されるU字溝の工事幅1.3mと、深さ0.8mに発掘が限定されていた。

また、裏三沢川から交差点を挟んで遺跡公園南まで、約68mは、所見したところ、攪乱などで土器などの遺物は見られなかった。さらにA地点に接する10mあまりも攪乱を受けており、破壊されていた。

その他の遺跡公園に接する部分からは、土器が集中しており、石鏃などの石器も検出された。今回提示した土器は、A地点10点、B地点142点であり、調査面積を比較すると、遺物の集中度が理

解される。

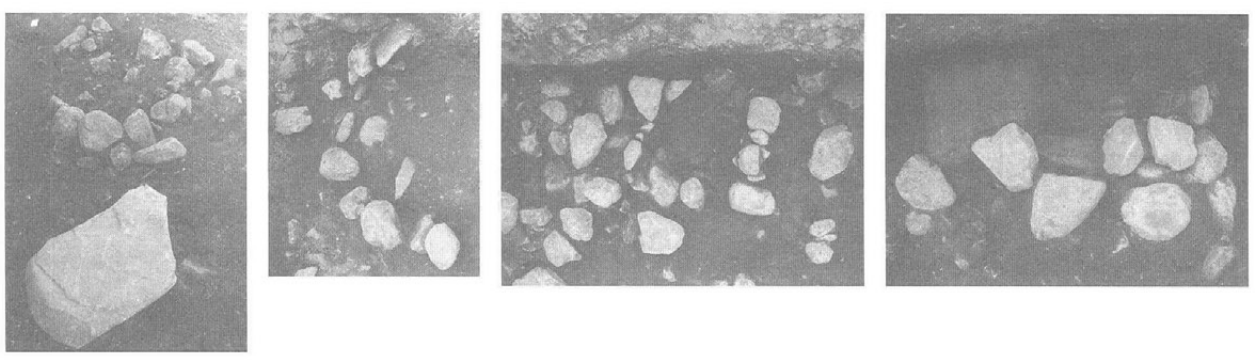
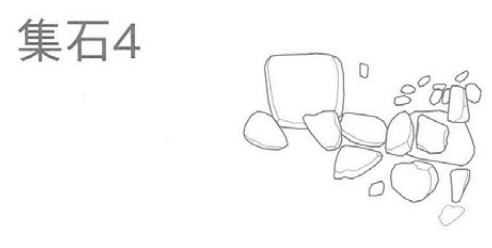
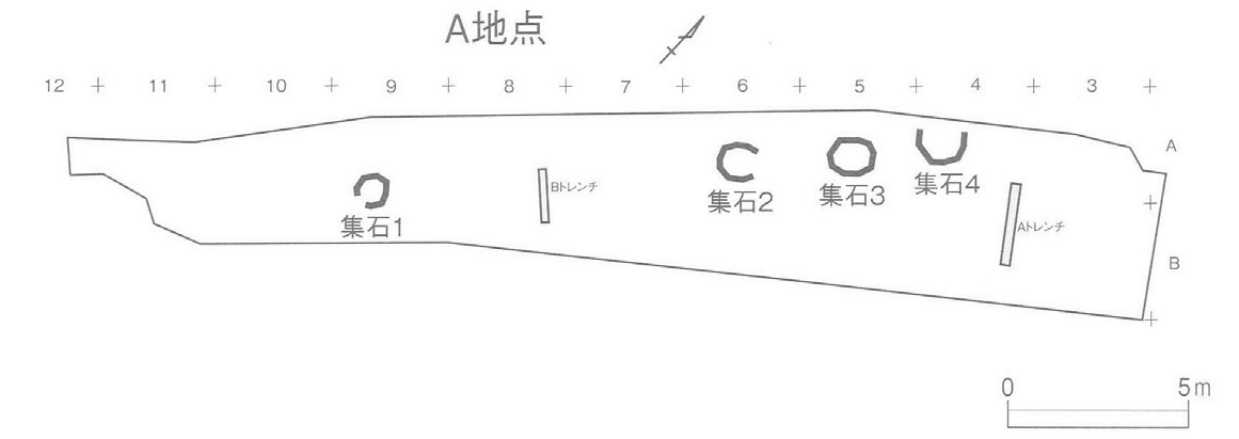
しかし調査の幅と深さの制限のため、遺構などは検出できなかった。



東から見たA地点の礫群の状態



B地点の遺物出土状態



第5図 集石位置図

### 第3節 佐野遺跡公園の樹木

佐野遺跡公園の周囲には、縄文時代に生育していたと思われる樹木が植えられている。

今では造成された公園の趣旨も忘れられて、遺構の復元表示に、無造作に石が集められたりして、再整備する必要にせまられている。そこで遺跡の見学者や、地域の人達の遺跡に対する愛着や、理解を深めるため、植栽樹を考古学や、民俗学の本から引用して記してみる。

#### 1 檜（ブナ科）

ナラやクヌギの実にはドングリがなる。クヌギの方が生育がよく実も大きい。クヌギは筆者の住む中野市では、近代になって植林されたものが多い。

ナラの実には熊などはそのまま食べるが、人はアク抜きしないと食べられない。

ナラの実には霜が降りると落ちる。ゆでて乾かしておくと虫がつかない。この干したものを臼に入れて、木または石の棒状のもので、ついて皮をはがすと実は二つに割れる。

これを石で囲った釜（深鉢）に入れ、中へヒノキ材の灰の入ったカゴを入れて煮る。すると醤油のような水がでる。これをくみ出し、また水を入れてくみ出す。これを繰り返して、くみ出す水がきれいになるまで煮ると、実が砕けてシブ味がとれてくる。これをムシロにひろげて乾すとカラカラに乾いて、保存するのによい。それに煮え湯をかけると食べられる。

#### 2 栃

トチの実には凶作の時の備荒品として知られている。また、実をくりぬいて笛にもなるという。

トチの実を水に浸して水なら3日、ぬるま湯なら2日浸して、熱い湯でふやかし、少し長めの石で、叩いて皮をむく、これに水を入れて増やす、この水を空けるときの白い泡（キシブ）が立つ、この泡がとれるまで水にさらす。早くするにはぬるま湯を使う。5～6日しきりに水を変える。

キシブがとれたら熱湯の中へ入れ、湯気の出ぬよう蓋をして、少し温まったところへ木灰をトチの実と等量くらい入れ、煮え湯を入れ、かきまぜて蓋をきちんとして、3日たつと苦味がとれる。灰とトチの実を離し、割ってみてきれいな黄色になればよい。保存には乾かしておく。

ロクロ細工の木地屋は、近代以前は、加工に適した栃の木を求めて、移住していたといわれている。山で栃の木を大割をして、斧で器物の形におおよその形に整え、背負い下してロクロで成型したという。その際に蒸すと加工がしやすくなるという。

縄文時代もこのようにして石器を使い、蒸すか、焼くかして木器を製作していたと思われる。

#### 3 栗

佐野遺跡の栗は、平成21年には沢山になっていた。本州本部は植物分布上では、クリ帯とよばれている。近辺の山の栗は、シバ栗といって小粒のものが多くはよい。

栗は食品としては手間がかからず食べることができる。生でもよく、煮て干しておくとも長期の貯蔵にもよい。縄文時代でも栗を栽培管理していたのではと、考えている人も多い。

栗の木は耐久性に強く、家の土台、鉄道の枕木の材料としてもちいられた。縄文時代も当然経験から熟知して木柱や住居に利用されていたとおもわれる。

### 第4節 現在の佐野遺跡周辺の動植物について

#### 1 動物

現在は農業が衰退して荒廃農地が増加し、温暖化によって積雪量も少なくなっている。

加えて狩猟する人も高齢で減少している。このため、カモシカ・熊・猪・猿のほか、日本鹿も生息するようになった。次に筆者の見聞した中から記してみる。

### a カモシカ

身じかにいたウサギ・タヌキ・キツネなどのほか、里山に早くから姿を現したのはカモシカである。岩場を好み、人には危害を与えず、会っても少し逃げるか、立ち止まってこちらを見ている。

昭和30年（1955）特別天然記念物に指定され、禁猟となった。それまではよく捕獲され、毛皮が利用されていた。良質の防寒、防水用に適し、猟師が腰皮に用いていた。湯倉洞窟（長野県高山村）でニホンシカ・カモシカ・サルなどの骨が発見されている。山ノ内町ではヤマシシ、クラシシなどとよんでいる。志賀高原では春先に雪庇の下に隠れていて、上を通るカモシカの足をコスキ（雪を掻く道具）や棒で、足をたたいて捕獲したと言われている。

ここで皮の鞣し<sup>なめ</sup>の方法を記す。

皮は脂肪や蛋白質を除去しないと硬化し、腐敗する。そこでコラーゲン繊維のみ残し、柔軟性、多孔性、耐水性、耐熱性を増すようにする。佐野遺跡周辺で可能性のある皮の鞣し方の技法を記す。

- 1) 当初水さらしして乾燥させ、脂肪を削り取る。
- 2) 木灰を塗りこんだり、糞尿につける糞尿揉み。
- 3) 脳醬や魚卵を塗り込める。脳醬揉み。
- 4) 植物のタンニン<sup>タンニン</sup>を塗りこむ、タンニン揉み。
- 5) 松葉などをいぶした煙りをあてて保存性を高める。

さらに水さらしと乾燥の過程を繰り返す。河原などの水と石の多い所で作業すれば都合がよい。

### b 猿

縄文時代には猿も狩猟の対象だった。隣村の高山村の湯倉洞窟からは、猿の骨が発見されている。著者の所では前には、集団で群猿20~30匹で来て、農作物を荒らしたが、猪が出るようになってからは、はぐれ猿が1~2匹で来るだけとなった。

果物なら何でも取り、栗・柿などの木の実から、根茎類、稲・豆・南瓜など畑作物なら何でも食べる。不思議とアスパラは食べないという。冬は蟹なども探して食べる。

巣は作らず、仔は一年中生むという。仔を背

負って歩いている。

群猿で来たときは、ボス猿が見張っていて、啼くと逃げる。冬は餌が無いので、葛の実を集団で食べていたのを見たことがある。

猿の頭が血薬になるので、黒焼きにして用いる。産後の頭痛にもよく、胆は血薬によく、息をひいた人でも生きるという。目薬にもなる。肉は秋が一番味がよく、皮は柔らかくあまり値打ちがない。

### c 猪

猪は近世には里山にも生育していたが、村田銃の出現で姿を見せなくなったと、言われている。近年は暖冬の影響と農地の荒廃などによって生育頭数が増加し、盛んに人家の近くまで出没して農作物を荒らして農家を困らせている。

雨降りや夏にはカヤや草を1m位集め、下を掘って寝ているという。天気の良い日は岩の下でも寝ている。猪のよく出没する所はやや平らで水がにじむ湿地にはヌタバと呼ばれる窪みがある。これは8~10月ころに多くある。近年は水田に入って稲を食べたり、踏み込んだりして収穫がなかったりする。そして松や樅などのヤニの出る木に体をこすりつけて寄生虫などを駆除している。

いも、豆、そば、豆の葉、木の実はもちろん堅い胡桃の実も割って食べる。蝮が大好物で臭気がすれば掘って食う。ほかの蛇も食べる。蝮に食いつかれたら猪の鼻を削ってノリで練って貼ると毒が消されるといわれる。

近年は畑の好物のミミズを掘り、果樹園のリンゴやブドウなどを飛び上がっても食べる。雑食性である。冬は葛ノ根、カタクリなどの澱粉質のものを掘って食べる。

筆者が猪の生息を気付いたのは、南向きの山で石の多い所だったが、葛が沢山繁茂しており、葛の根が掘り散らかされていたのを見たのが最初である。

猪などを捕獲するには通り道を見つけることが必要である。それには積雪が多少あった方が有利である。

## 2 織物・袋物（繊維の利用）

佐野遺跡に住んでいた人達も当然、衣類をまとっていたし、物を入れる袋も必要だったと思われる。

当時の多彩な織る、編むことの痕跡は、土器の底部の網代痕からも推察される。近代の北信地方の民具などを参考に記すると、麻の栽培は古代から、木綿の栽培は、中世後期からといわれている。それに以前は、山野に自生していた植物から取ったもの、動物の皮などを利用していただと思われる。

### a 藤布

真藤の根の地表に張っている部分の皮を利用する。水が上がってから採取し、表皮は捨て、すぐにでも、または、乾燥させて保存し、暇の時に灰を入れて煮て、洗って水にさらしておく、よくさらしたら干しておく。これを細かくさいてつなぎ、玉にまいておいて、漉りをかけて糸にする。繫ぐ時は、端の太い部分を二つに割って挟んで繫ぐ、寒中に外へさらして置くと、柔らかくなるという。これを編んで袋物にしたり、上に羽織るものを作るが、肌着の衣類が傷むといわれる。

### b 科の皮

以前には軽井沢の熊野皇大神社の科の樹が樹齢800年と言われ知られていた。しかし山ノ内町の志賀高原の一の瀬にもこれに負けない大きさの科の樹があり、県の天然記念物に指定されている。科の樹は中部地方から北海道に生育の分布がある。信濃の国名のもととの説もある。

20年くらいの科の木を切り、水中に入れて置くと外皮は腐り、強靱な内皮を糸にして利用する。山ノ内町では以前ハバキや、ミゴカマスの縄などに利用していた。蓑の材料などにも利用する。また、科の花からとれる科蜜は珍重されている。

### c 胡桃の皮

胡桃の皮も丈夫である。代かきのマンガを引く時の縄に利用した。また、皮を大きく剥いで、四

隅を縫い付けてカゴをつくり、イワナ、カジカなどをに入れて運ぶ用具にする。

### d アカソ

アカソは野生のカラムシである。秋山郷地方では、アカソ・エラソと言って、編布（あんぎん）の材料にしていた。中近世の青苧は、奥信濃から越後の名産品で、夏の衣料としてもちいられていた。アカソは近くの山野に、多く自生している。筆者の小学校時代は戦争中で、食料増産第一であり、衣料などが不足して、学校で秋になると、山にアカソを刈りに行った。後に学生服として配給されたが、肌ざわりが悪かったことを覚えている。

### e イラ・楮（こうぞ）

イラの若芽は食用として珍味である。葉先にトゲがあってさわると痛い。この皮の繊維もアカソ同様利用される。諏訪神社の御神紋は梶の葉である。梶は楮と同種である。古くからこの地方の山野に、自生していたと思われるが、利用が縄文時代まで溯れるか、疑問もあるが、皮の繊維は柔らかく、雪に晒すと白くなり、加工もしやすくなる。今でも飯山市では楮皮で和紙が作られている。衣類にすると、濡れると弱くなる心配があるが、保温がよく、肌ざわりもよい。

### f 山繭・シラガダユウ（白髪大夫）

縄文時代に山繭が利用されたかどうかは、確証がないが、筆者の体験と、文献から記してみる。

山繭蛾はクヌギ・ナラ・カシワなどの、葉を食べて山野に生息している。7月の末ころ葉をよせて黄緑色の長楕円の繭を作る。また、殻が堅くしまった緑色の似たような繭玉もある。蛾のでない山繭を取ってきて煮て、3～4個の糸口から引き出して、糸にすると均一な繭糸が取れる。しかし、秋になって蛾の出た後の繭（巢殻）を集める方が容易である。巢殻を藁アクに3日ほどつけて、うみだせば茶色の水が出る。これを繰り返して、青色から白色になればよい。乾くと黄緑色になる。

白色になったものを水につけて、四角な枠に引き伸ばして、乾いたものを糸（紬糸）にする。山繭の糸はどの染料でも染まらない、光沢がある。現在は織物が希少価値のため、珍重されている。

白髪大夫は7月ころ胡桃・栗・櫟の葉を食べる。一か所に多く発生していることがある。年に2回発生し、繭には柄があって枝につき、葉を丸めて楕円形の茶褐色の繭を作る。糸の性質が悪く灰などを入れてよく煮ないと、糸にとれないといわれる。それよりも繭を作る寸前の白髪大夫を捕らえ、体の中の絹糸線を引き出して、酢につけて釣り糸を作る。筆者の幼い頃に、体験したものである。以上佐野遺跡周辺の、原始時代から利用された可能性のある動植物の主なものについて記してきた。魚類の捕獲については、夜間瀬川関係では、三沢川・角間川は、横湯川に比較して水質がよく、狙上する鮭・鱒などは、多かったと思われるし、筆者の体験からも住んでいる魚類が多かった。これらが佐野遺跡成立の一つの要因ではなかろうか。

以上の引用文献は次のようである。

向山雅重 『続信濃民俗記』 1990

市川健夫 『信州学大全』 2004

飯田市美術博物館

柳田国男記念伊那民俗学研究所

遠山谷南部の民俗 2008

同

遠山谷北部の民俗 2009



# 第三章 遺物

## 第1節 縄文時代

### 1 晩期土器

縄文晩期時は、東北地方に文化の核がある亀ヶ岡式文化圏の、影響下に生れた土器文化を指標としている。その直接的な影響を受けたのは、新潟県北半までである。したがって長野県北部に属する佐野遺跡は、亀ヶ岡系文化圏からの直積的、間接的な影響と、それに関連する周辺遺跡からの土器文化の影響がみられる。

縄文晩期の年代は<sup>14</sup>C年代によれば、3000～2500年前とされている。

佐野遺跡出土の土器の変遷（編年）は、昭和33（1958）・34年の発掘調査（遺跡公園の所）によって出土した土器をもとに分類して、永峯光一氏が、昭和42（1967）年に発表された研究報告書『佐野』に基づいている。

亀ヶ岡系土器の変遷は、大洞貝塚出土土器その他で、山内清男氏によって大綱を示され、大洞B式→大洞BC式→大洞C式→大洞C1式→大洞A式→大洞A'式に編年されている。

永峯氏はこの大洞式と、佐野遺跡の土器と対比して、①亀ヶ岡系の佐野式成立以前の土器、②佐野I式土器（大洞BC式とC式伴行）、③佐野II式（大洞C2式伴行）とされている。

その後、大原正義氏（1981年）は飯山市山ノ神遺跡の調査の結果、佐野Ia式は連鎖状三叉文を主文様として分類している。

佐野式成立以前の土器は、亀ヶ岡系の精製された土器で、雲形文で飾られ、B突起などあり、刺突文帯などをともなっている。佐野I式は亀ヶ岡系土器の基本文様の三叉文・入組文・鍵の手文・列点文などが施されている。

佐野II式は連鎖状三叉文を基として、大洞C2式の入組工字文から影響を受けたと見られる粗大な工事文が特徴とされている。

今回の発掘調査も既述のごとく限られた面積の

調査のため、土器の接合資料は少なく、器形の判明も僅かである。一つの土器には各種の文様が施されているが、破片資料が多いため恣意的ではあるが、便宜上以下のように提示した。

- 1 三叉文の土器
- 2 刺突文の土器
- 3 雲形文の土器
- 4 羊歯状文（連鎖状三叉文）の土器
- 5 鍵の手文の土器
- 6 波状文の土器
- 7 工字状文の土器
- 8 縄文と綾絡文の土器
- 9 撚糸文の土器
- 10 口端部の刺突文と裁列文の土器
- 11 口端部加飾の土器
- 12 浮線網状文の土器
- 13 綾杉文の土器
- 14 その他の土器

次に今回検出された主な土器の概説を進めるが、破片資料のため、誤認や未確定の器種など存在することをお断りしておく。

### 2 主な出土土器について

#### 1 三叉文の土器

三叉文は、晩期中葉までの土器に用いられた文様で、沈線と彫去によって表現している。

土器図1の2は小型の壺の上半部に彫去の三叉文を2条の沈線でかこんでいる。客体的な土器である。5は鉢形土器の連結三叉文である。石川県の御経塚式土器と親縁関係が認められるといわれている。7、9、10は大洞C1式（佐野Ia式）からの雲形文に三叉文が見られるものである。

#### 2 刺突文の土器

13、14は連続して押捺や刺突によって、沈線間や隆線上、口端部に施される文様は、佐野式期全般に各種土器に施される文様である。また他の文様と組合わされるから、単独のものを比較して分類すれば、製作された時期が判明すると思われる。

### 3 雲形文の土器

18は半肉彫的な雲形文で佐野Ⅰa式である。他に28、29、31、39など双曲線、楕円があり、縄文が充填される。39には口縁に突起があり、下に2孔がある。佐野Ⅱ式になると33、35、36、41のごとく孤線文的になる。103は外面黒色、内面赤褐色を呈し、器厚4mmの半精製の小型長頸壺である。上半部に沈線で雲形文が描かれている。器形は大洞C1式にみられ、佐野Ⅰb式期かと思われる。

### 4 羊歯状文（連鎖状三叉文）の土器

今回は点列化した羊歯状文はみられないようである。2図50は壺形土器で、口端部が欠損し、肩部に把手の痕跡がある。上に連続刺突文があり、下に半肉彫で、羊歯状の文様が入り組んでいる。上下に点列はなく大洞B式段階の所産ともみられる。焼成は軟らかく胎土、文様とも佐野では異質の土器であり、搬入品と思われる。文様は新潟県石船戸遺跡第Ⅲ群a類と同県道端遺跡ブロック2出土土器に類例がある。

### 5 鍵の手文の土器

2図51、54、56、61などは、佐野Ⅰb式に伴う土器で、沈線による鍵状の模様が連結している。そして列点文や入組文とも組み合わせられて、土器上半部の文様帯となっている。

### 6 波状文の土器

3図102の土器は器壁に屈折がなく円筒形をなし、器厚は8mmである。内面にヘラによる成型痕がある。外面は口縁から縄文、沈線間素文、沈線間の縄文を磨消して上下に沈線で波状文を描いている。波頂間は彫去されず、下は素文、縄文となり、横帯の文様となっている。この文様は佐野ではあまり見かけない土器である。

### 7 工字文の土器

(1) 2図62、64は沈線による工字文とみられる。  
(2) 63、65は彫去による工字文で、粗大工字文とよばれたことがある。66、67や口縁内面に同様

な彫去の手法のみられる土器も同時期の所産とみられている。(1)が先行する土器で両者は佐野Ⅱ式に所属する。

### 8 縄文と綾絡文の土器

75、76は斜行縄文で、原体はLRである。77は鉢形土器の口縁部に横走する綾絡文が2条あり、新潟方面の土器に多く見られ居平、延命寺ヶ原遺跡などから出土している。また縄文に綾絡文がみられるのは83、84である。

### 9 撚糸文の土器

撚糸文は、縄を棒状のものに巻き付けて施文したものである。82の土器は器厚6mmの灰褐色した鉢形（甕形）土器である。胎土に金雲母、白色粒があり、やや軟質である。連続した小波状の口縁で、くびれから下に3条の沈線があり、縦位に撚糸文が密に施文されている。85は黒色を呈し、研磨された深鉢形土器で、内面に炭化物が付着している。撚糸文の土器である。両者とも佐野Ⅱ式期の搬入品かと思われる。

### 10 口端部の刺突文と裁列文の土器

3図86~94の土器は、口端部に加飾されている。86は甕形土器で、密に縄文が施文され、沈線2条もみられる。口端部に楕円状の押捺を連続させている。87は無文の土器で、口端部が波状を呈し、縦に裁列を連続させている。88は口端部に点列を加え、内面にも円形刺突と沈線がある。89は右、90は左から口端部に刺突を加えている。92は甕形土器で、口端部に楕円状の刺突を連続させてから整形されている。下に沈線と縄文がある。94は口端部の瘤状の点列の加飾の土器、95は円形の刺突の見える口端部の破片である。110は深鉢形土器で口端と上半部にB字状の突起のある土器で、沈線が3条みられる。所属時期の確定しない無文土器の所属を確定する手掛かりがありそうである。

### 11 口端（口唇）部の加飾の土器

(1) 永峯（1967年）は、口端部加飾の土器を

F群として分類している。発生の中心は北陸地方としている。96、97は無文の浅鉢形土器の口端の内側を肥厚させて、隆線と縄文の見られるものが検出された。石川県近岡遺跡や、本県では宮遺跡からも発見されている。

(2) 99は黒褐色の壺肩土器の把手の上部に付けられた加飾である。隆線で円形を連続させ、まわりを囲んでいる。下部が欠損して全容は不明である。大洞B式段階の客体土器と思われる。

(3) 100は小形鉢に縦に突起が付けられ上が刻まれている。他に縄文、連続刺突文、沈線がある。

### 12 浮線網状文の土器

4図128、129は壺形土器で、浮線網状文がみられる。両者とも結節状浮文となっている。128は上半部の破片で、他に縄文と沈線もある。129は中半部の破片で、左傾(RL)縄文の下に結節状の浮文がある。この文様の土器は、昭和33年(1958)の発掘時から検出されていたとみられるが、大洞A式をはじめ新潟県、県内など広く認められるため、佐野式独自色が認められず、『佐野』1967には報告されていない。今回検出されたものは、氷遺跡(小諸市)第1群土器(永峯1969)の前の段階の土器で、新潟県方面の影響下の土器と思われる。

### 13 綾杉文の土器

130は黄褐色の壺形土器で、沈線の下に横位に区画された中に、左右に矢羽根状に描かれている。131は口縁部に描かれた横位の綾杉文と沈線である。12の土器と同時期の所産と思われる。

### 14 その他の土器

今回も検出された土器片に、文様の見られないものが多数をしめている。文様が上半部に集中する事や、深鉢形土器などは、日常の煮炊きで使用されるため、破損も多く、文様は無文か沈線などがあるだけで、重要では無かったとみられる。121などのように、炭化物が付着している土器も多い。図示は無いが内面の底から4~5cm上から

炭化物がみられるものがあった。また、主に縄文上に赤彩された土器片がかなりみられた。さらに接合痕の見られる土器は、4図133~136がある。2図66は金雲母の見られる土器で、在地品のみでなく搬入されたと見られる粗製土器もあった。

## 3 土器底部圧痕

第1表 土器底部圧痕分類表

番号	圧痕種類	図版番号	備考
1	2本超え、 1本潜り、 1本送り	5図 153	圧痕後成型
2	6本潜り、 1本潜り、 6本潜り	〃 154	
3	雑ざり編み	〃 155	
4	1本超え、 1本潜り、 1本送り	〃 157	底部剥離

## 4 石器の観察表

第2表 石器観察表

図番号	出土グリット	分類	観察
1	A地点B-5	黒曜石	平基有茎鏃
2	B地点A'-4	チャート	凸基有茎鏃
3	A地点A-12	頁岩	凸基有茎鏃
4	B地点B'-3	頁岩	凸基有茎鏃
5	B地点B'-5	チャート	凸基有茎鏃
6	B地点B'-3	安山岩	凸基有茎鏃
7	A地点A-12	安山岩	凸基有茎鏃
8	B地点B'-3	安山岩	凸茎部欠損
9	B地点B'-3	安山岩	茎部欠損
10	A地点A-8	チャート	茎部、尖頭部欠損
11	B地点B'-3	チャート	糸巻型?
12	A地点A-7	黒曜石	剥片、上に自然面
13	A地点A-7	チャート	未製品
14	B地点B'-2	安山岩	凸基有茎鏃

15	B地点B'-3	安山岩	凸基有茎鏃、 尖頭部欠損
16	B地点A'-3	安山岩	石鏃 未製品?
17	B地点B'-3	安山岩	平基有茎鏃
18	B地点B'-2	安山岩	ピエス・エスキュー
19	B地点B'-3	安山岩	平基、先端欠損、未製品
20	攪乱	安山岩	尖頭器、基部欠損
21	B地点B'-5	安山岩	剥片、上に自然面
22	B地点A'-3	安山岩	上端から打撃
23	B地点B'-5	安山岩	剥片、上端自然面あり
24	B地点B'-3	安山岩	剥片、上端自然面
25	B地点B'-6	安山岩	尖頭器、未製品?自然面
26	B地点B'-2	チャート	未製品
27	攪乱	砂岩	砥石または獣皮の脂肪とり
28	B地点B'-2	砂岩	石製品 破片

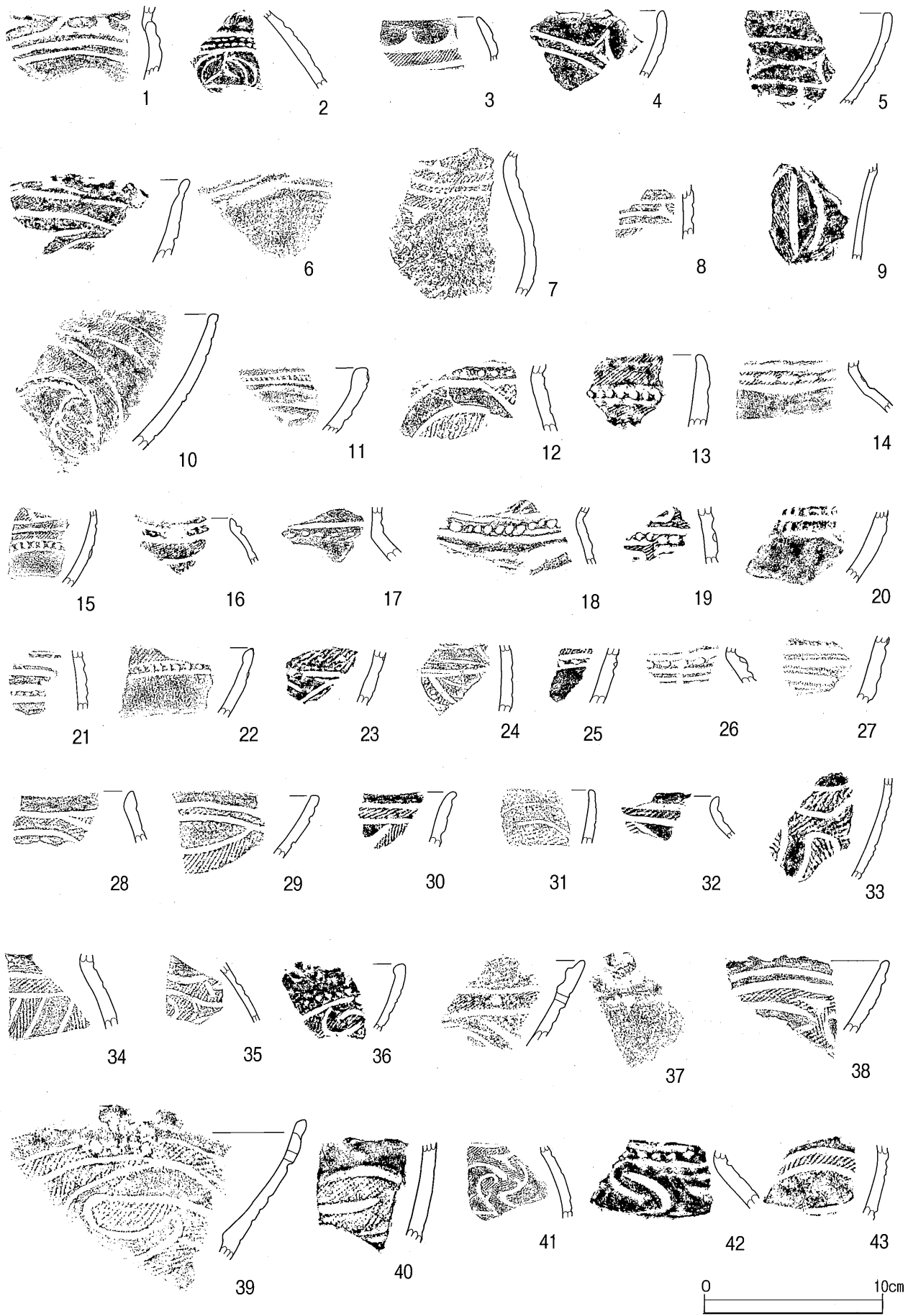
実測した物		その他	合計数
黒曜石	2	47	49
チャート	5	5	10
鉄石英	1	4	5
頁岩	2	61	63
安山岩	16	57	73
砂岩	2	2	4
合計	28	176	204

## 第2節 平安時代以降の遺物

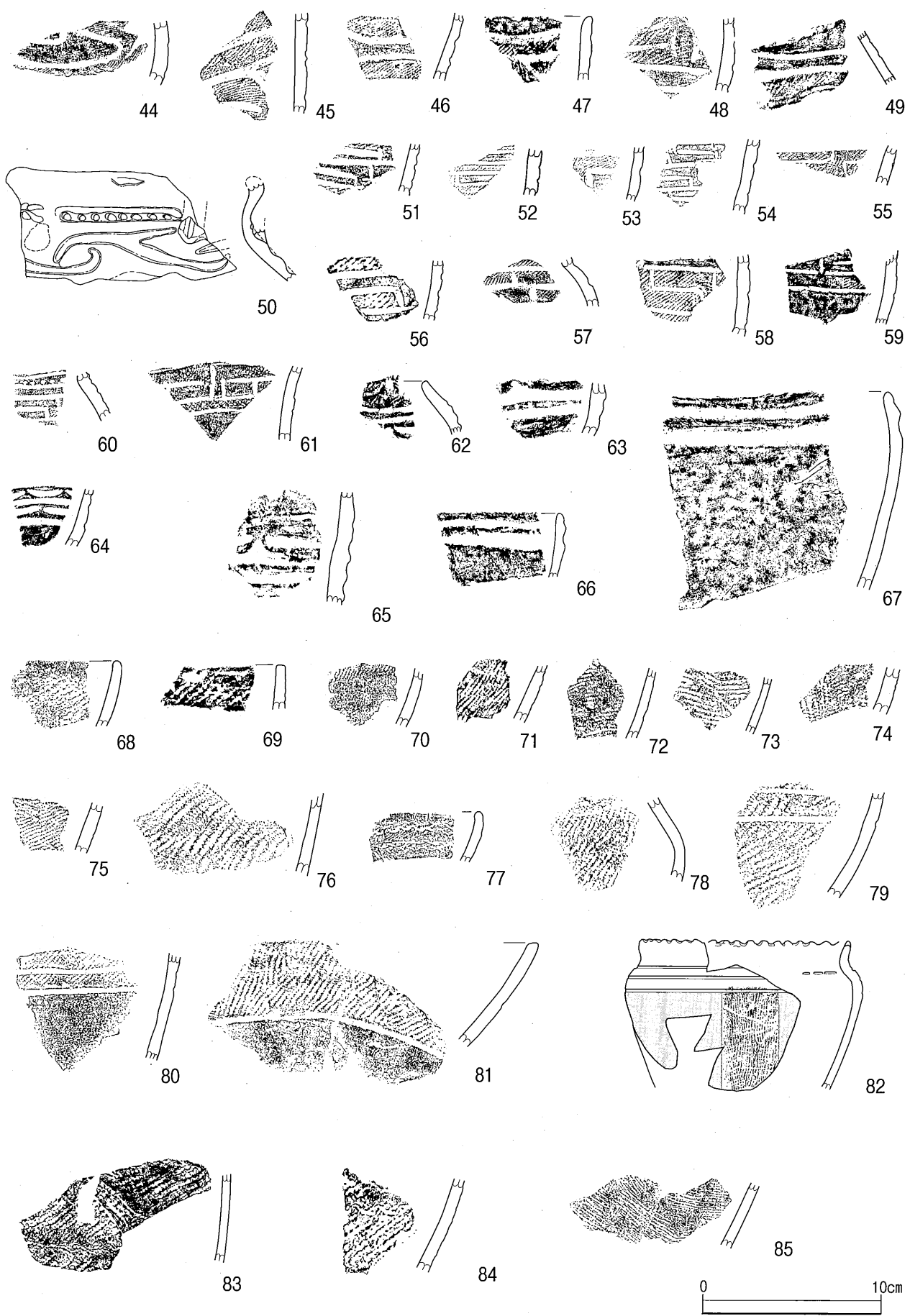
山の内盆地の弥生時代の遺物は、後期に属するものが、標高550m以下の所から発見されている。したがって盆地の奥まで開拓が進んだのは、奈良・平安時代になってからと思われる。

今回の調査ではA地点から高台付の内黒の椀破片が1点検出されたが、かなり磨耗しており、移動したものである。

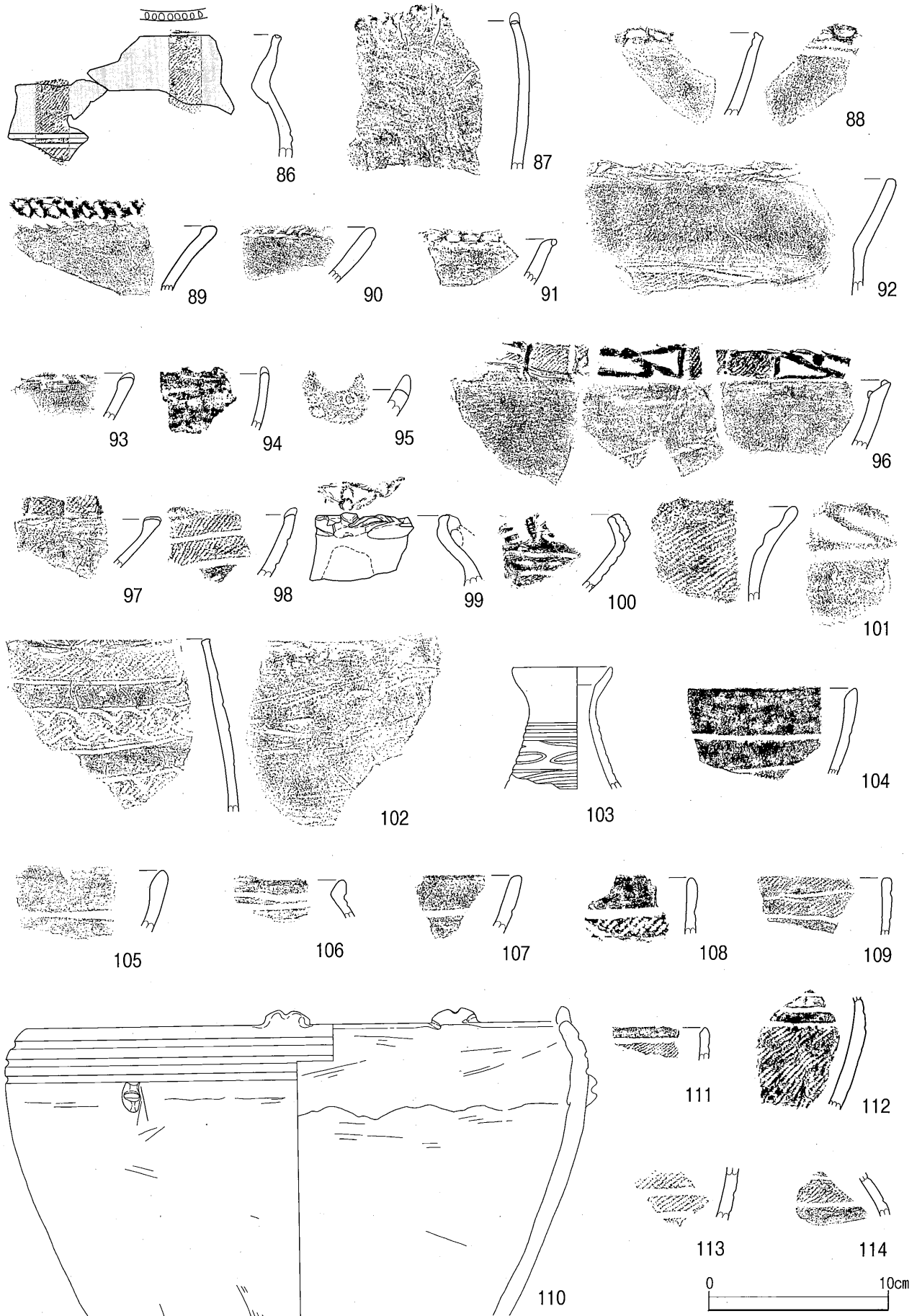
また中世の青磁椀の小破片もあった。



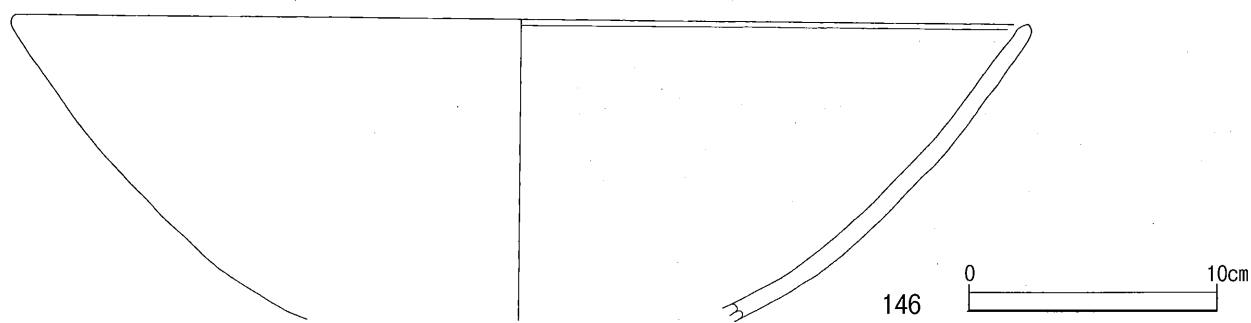
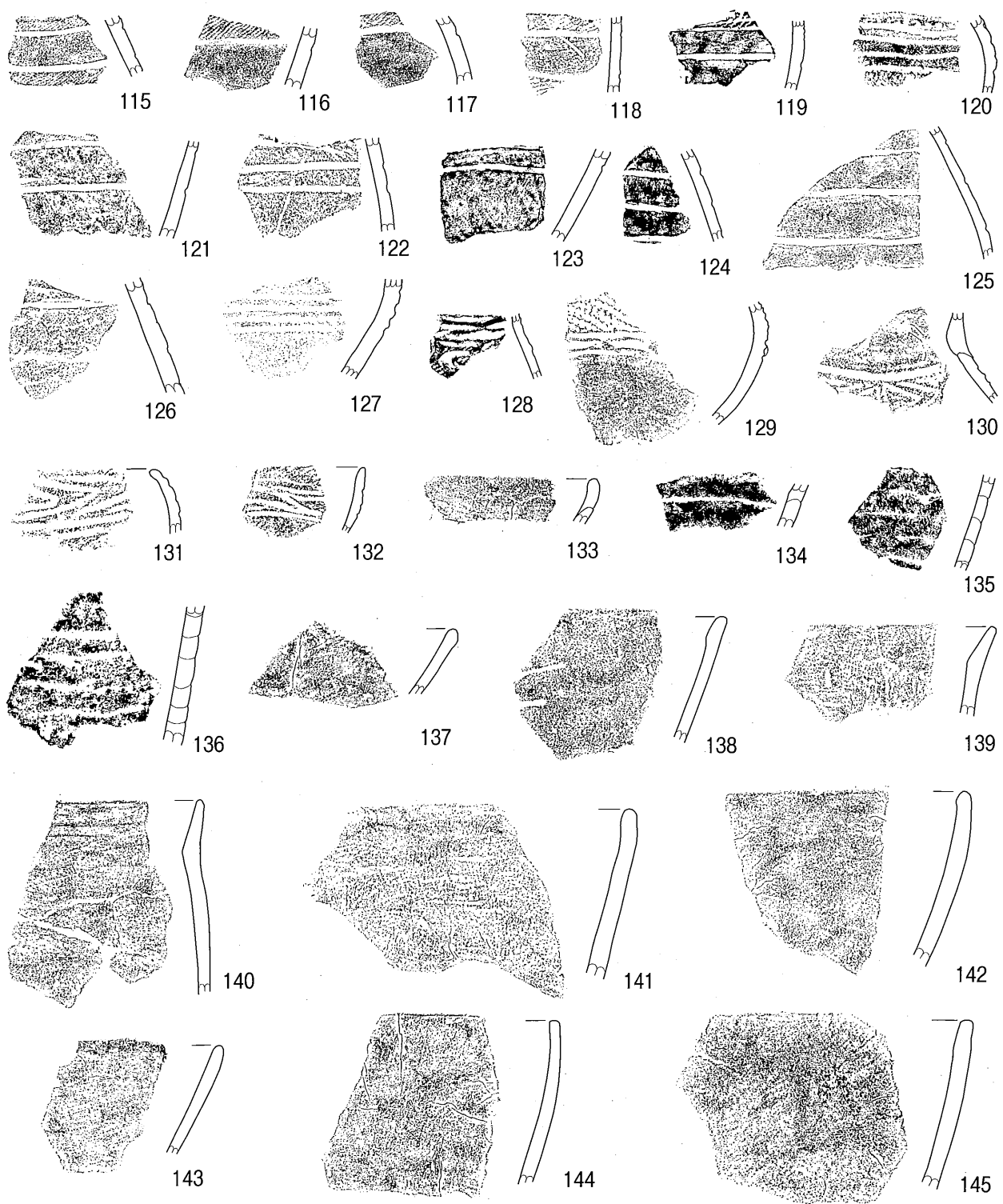
第6図 縄文晩期土器(1)



第7図 縄文晩期土器(2)

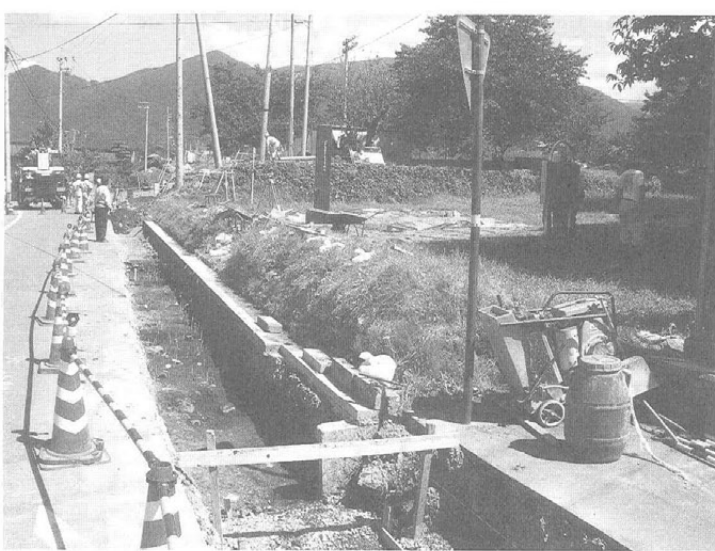
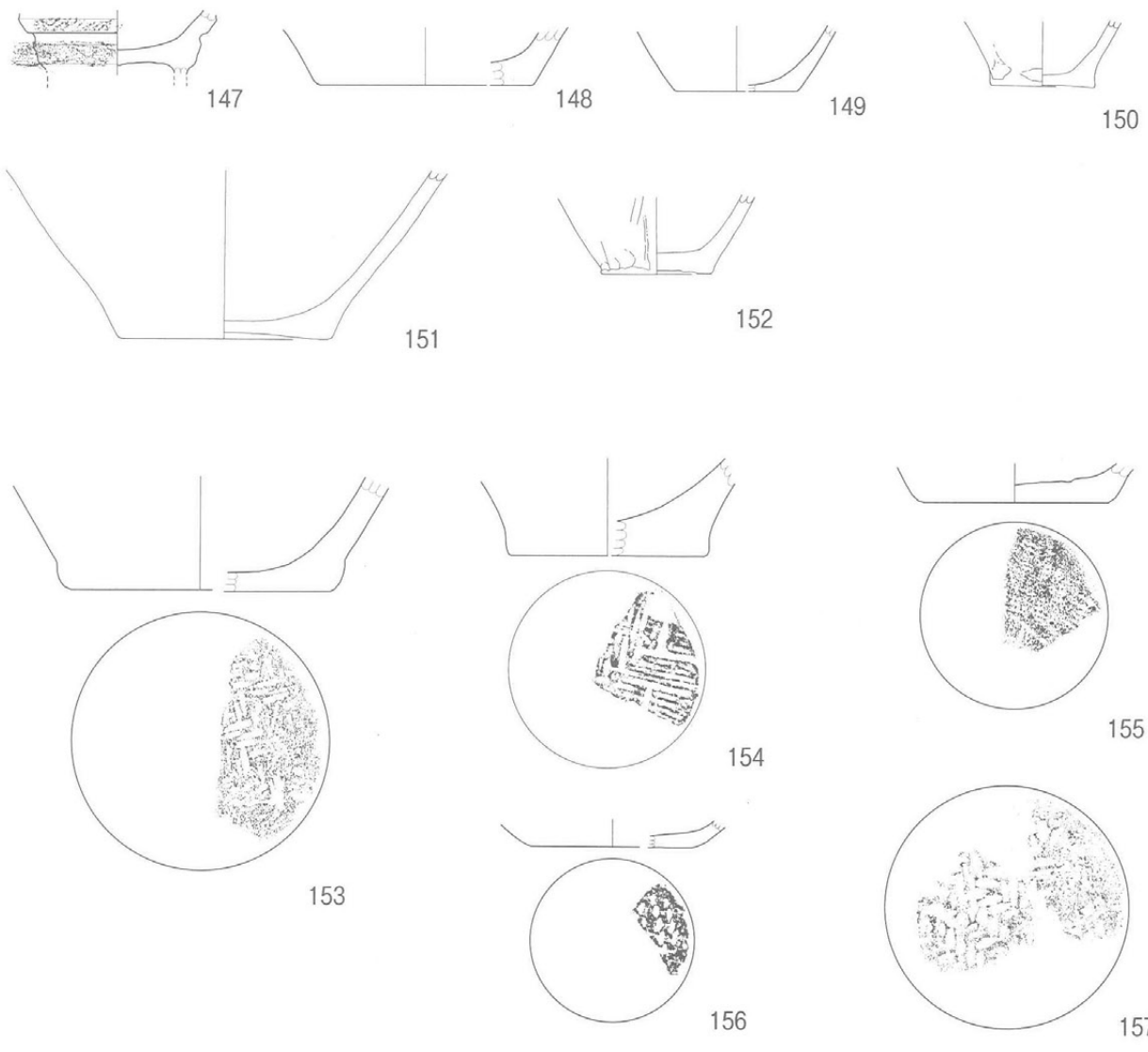


第8図 縄文晩期土器(3)



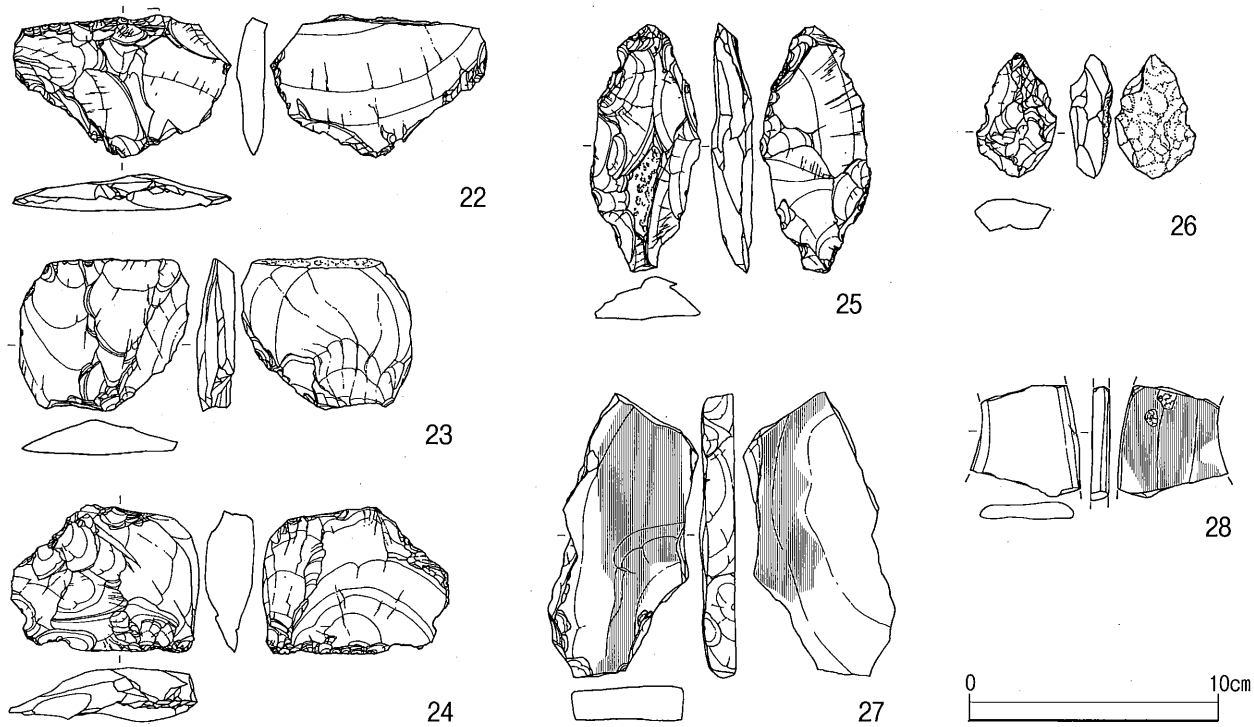
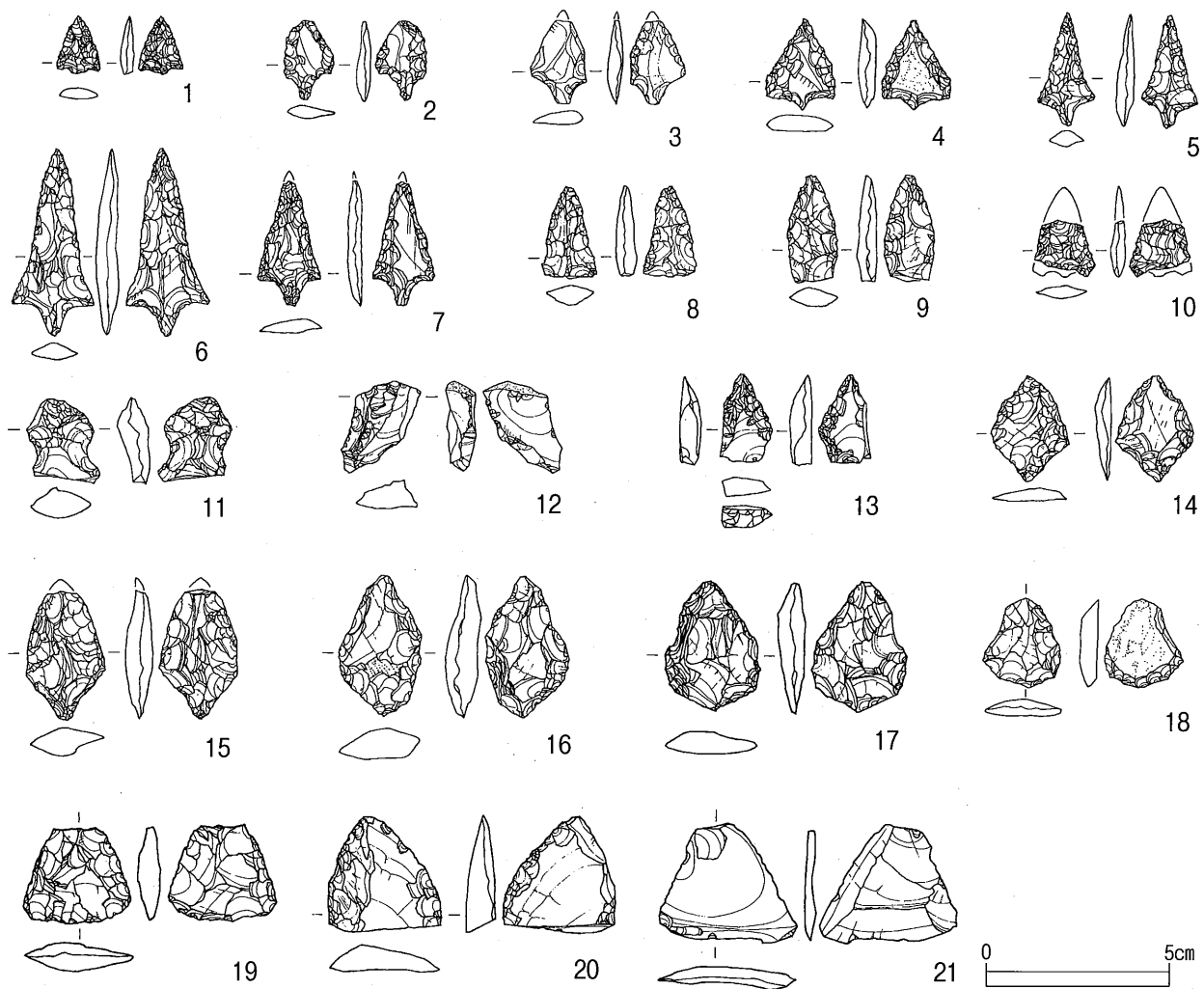
第9図 縄文晩期土器(4)





B地点の調査

第10図 縄文晩期土器・底部の圧痕(5)



第11图 石器

第3表 土器の観察と出土グリッド表

図版番号	図番号	出土グリッド	器種	部位	施文	焼成	備考
第1図	1	B地点A'-2	椀	上半部	LR縄文、沈線上三叉文	堅	研磨搬入
〃	2	B地点B'-2	壺	上半部	LR縄文帯、沈線曲線三叉文	〃	
〃	3	B地点B'-6	鉢	口縁部	三叉文、LR縄文、沈線	〃	研磨赤彩
〃	4	B地点B'-3	〃	〃	口縁の波状下に三叉文	〃	研磨
〃	5	B地点A'-2	〃	〃	沈線、連結した三叉文	〃	内面研磨
〃	6	B地点B'-2	〃	〃	三叉文彫去、口端加飾、内縁加飾	やや軟	石英粒あり
〃	7	B地点B'-3	〃	上半部	沈線下に三叉文	〃	
〃	8	B地点A'-2	壺	上半部	沈線間三叉文	堅	粗製
〃	9	B地点B'-3	鉢	上半部	RL縄文、三叉文	〃	
〃	10	B地点B'-6	浅鉢	上半部口縁	曲線帯、細い隆帯、三叉文	〃	金雲母：整形良
〃	11	B地点B'-2	鉢	口縁部	連続刺突文、三叉文	〃	
〃	12	B地点B'-3	〃	上半部	連続刺突文、雲形文	〃	
〃	13	B地点B'-5	〃	口縁部	連続刺突文	?	
〃	14	A地点A-12	壺	上半部	縄文上連続刺突文	堅	
〃	15	B地点B'-4	小形壺	上半部	沈線、連続刺突文	〃	
〃	16	B地点B'-3	〃	口縁部	細隆帯上連続刺突文	〃	研磨
〃	17	B地点B'-6	壺	上半部	沈線、連続刺突文	〃	
〃	18	B地点B'-3	〃	〃	連続刺突文、彫去部隆帯	〃	搬入？
〃	19	B地点攪乱	鉢	〃	曲沈線、連続刺突文	〃	
〃	20	B地点A'-2	壺	上半部	連続刺突文	やや軟	
〃	21	B地点A'-4	壺	上半部	連続刺突文、彫去部	堅	
〃	22	B地点B'-6	鉢	口縁部	連続刺突文	〃	
〃	23	B地点B'-3	壺	上半部	斜行沈線文	〃	
〃	24	B地点B'-3	深鉢	上半部	斜行沈線文、細刺突文あり	〃	安行系？
〃	25	B地点B'-5	鉢	上半部	沈線間連続刺突文	〃	
〃	26	B地点B'-2	〃	上半部	沈線、連続刺突文	やや軟	
〃	27	A地点A-5	深鉢	上半部	連続刺突文、工字文系？	堅	
〃	28	B地点A'-3	壺	口縁部	曲沈線	〃	
〃	29	B地点B'-2	浅鉢	〃	曲沈線	〃	
〃	30	B地点B'-3	鉢	〃	横縦沈線	〃	
〃	31	B地点B'-3	鉢	〃	曲沈線	〃	
〃	32	B地点攪乱	小形壺	〃	〃	B攪乱	縄文上赤彩
〃	33	B地点A'-3	小形壺	上半部	〃	堅	
〃	34	B地点攪乱	鉢	〃	横縦走沈線	〃	縄文上赤彩
〃	35	B地点B'-3	小形鉢	上半部	曲沈線	〃	
〃	36	B地点B'-6	壺	口縁部	曲沈線、口端加飾、連続刺突文	〃	
〃	37	B地点A'-2	鉢	〃	曲沈線、口縁加飾	〃	穿孔あり
〃	38	B地点A'-3	〃	〃	曲沈線、口端刺突	〃	雲形文
〃	39	B地点B'-3	大形鉢	〃	曲沈線	〃	
〃	40	B地点B'-5	鉢	〃	口縁突起穿孔、曲沈線	〃	
〃	41	B地点B'-4	壺	上半部	〃	〃	
〃	42	B地点A'-4	〃	〃	連続刺突文、曲沈線	堅	
〃	43	B地点攪乱	〃	〃	曲沈線	〃	
第2図	44	B地点A'-5	小形壺	〃	曲沈線	〃	
〃	45	B地点A'-3	鉢	上半部	曲沈線、縄文、彫去	〃	
〃	46	B地点B'-3	小形鉢	〃	曲沈線	〃	
〃	47	B地点攪乱	〃	口縁部	沈線、連続刺突文	〃	
〃	48	B地点B'-3	鉢	上半部	沈線鍵形	〃	
〃	49	A地点A-11	〃	口縁部	〃	〃	
〃	50	B地点B'-3	壺	〃	連続刺突文、羊歯状文+三叉文	やや軟	把手欠落
〃	51	B地点B'-3	鉢	上半部	鍵の手文	堅	

図版番号	図番号	出土グリット	器種	部位	施文	焼成	備考
第2図	52	B地点B'-5	鉢	上半部	鍵の手文	堅	
〃	53	B地点B'-2	鉢	〃	〃	〃	
〃	54	B地点B'-5	深鉢	〃	〃	〃	
〃	55	B地点B'-5	鉢	〃	〃	〃	
〃	56	B地点B'-3	深鉢	〃	〃	〃	
〃	57	B地点攪乱	鉢	〃	〃	〃	
〃	58	B地点攪乱	深鉢	〃	〃	〃	
〃	59	B地点B'-6	〃	〃	〃	〃	
〃	60	B地点B'-5	壺	〃	連続刺突文	〃	
〃	61	A地点A'-10	深鉢	〃	〃	〃	
〃	62	B地点攪乱	小形壺	口縁部	〃	〃	
〃	63	B地点B'-4	深鉢	中半部	粗大な沈線、連続刺突文	〃	
〃	64	B地点A'-3	鉢	口縁部	工字文	〃	
〃	65	B地点B'-7	深鉢	上半部	〃	〃	
〃	66	B地点A'-2	〃	口縁部	凹線状沈線	〃	
〃	67	B地点B'-2	深鉢	〃	粗大な沈線	〃	胎土に金雲母
〃	68	B地点A'-3	鉢	〃	縄文	〃	口縁部素文
〃	69	B地点攪乱	小形鉢	口縁部	〃	〃	
〃	70	B地点A'-3	鉢	中半部	〃	〃	
〃	71	B地点B'-2	〃	〃	〃	〃	
〃	72	B地点攪乱	〃	上半部	縄文横走	〃	
〃	73	B地点A'-3	〃	〃	縄文	〃	
〃	74	B地点B'-3	〃	〃	〃	〃	
〃	75	B地点攪乱	〃	中半部	縄文綾絡文	〃	
〃	76	B地点B'-4	深鉢	〃	〃	〃	
〃	77	B地点B'-6	鉢	口縁部	綾絡文横走	〃	
〃	78	B地点B'-2	壺	上半部	LR縄文	やや軟	
〃	79	B地点B'-4	深鉢	〃	沈線、縄文	〃	
〃	80	B地点B'-5	〃	〃	〃	堅	
〃	81	B地点B'-6	皿	口縁部	縄文、沈線、素文部あり	〃	
〃	82	B地点B'-4	鉢	〃	口端部加飾、沈線、撚糸文	やや軟	胎土に金雲母
〃	83	B地点B'-3	深鉢	中半部	縄文綾絡文	堅	
〃	84	B地点B'-3	鉢	〃	縄文綾絡文	〃	
〃	85	B地点A'-3	深鉢	〃	撚糸文	〃	内面平滑炭化物
第3図	86	B地点A'-3	〃	口縁部	口端部連続刺突文	〃	内面研磨
〃	87	B地点B'-3	深鉢	〃	口端部連続刻目、無文	〃	
〃	88	B地点B'-3	鉢	〃	口端部加飾、連続刺突文	〃	
〃	89	B地点攪乱	深鉢	〃	口端部外から連続刺突文	〃	
〃	90	B地点B'-6	鉢	〃	〃	〃	
〃	91	B地点B'-5	〃	〃	〃	〃	
〃	92	B地点B'-4	深鉢	〃	〃 沈線	〃	
〃	93	B地点B'-4	鉢	〃	口端部外から斜刺突文	〃	
〃	94	B地点A'-4	〃	〃	口端部瘤状加飾	〃	
〃	95	B地点A'-2	不明	〃	口端部加飾破片	〃	
〃	96	B地点B'-6	鉢	〃	口端部、肥厚加飾	〃	同体3
〃	97	B地点B'-4	小形鉢	〃	〃	〃	
〃	98	B地点A'-3	鉢	〃	平行沈線、口端加飾	〃	
〃	99	B地点攪乱	小形壺	〃	沈線口端部加飾	堅	把手欠損
〃	100	B地点B'-3	小形鉢	〃	沈線縄文連続刺突文瘤状突起	〃	
〃	101	B地点A'-2	深鉢	〃	縄文、内面縁帯文	〃	
〃	102	B地点B'-4	〃	〃	縄文、沈線、横帯文	〃	
〃	103	B地点A'-3	小形壺	〃	沈線の雲形文	〃	

図版番号	図番号	出土グリット	器種	部位	施文	焼成	備考
第3図	104	B地点B'-3	深鉢	口縁部	沈線	堅	
〃	105	B地点B'-3	鉢	〃	〃	〃	
〃	106	B地点A'-4	壺	〃	〃	〃	
〃	107	B地点B'-3	鉢	〃	〃	〃	
〃	108	B地点B'-3	深鉢	〃	〃 縄文	〃	
〃	109	B地点B'-3	鉢	〃	沈線	〃	
〃	110	B地点A'-4	深鉢	〃	B突起、沈線3条	〃	炭化物附着
〃	111	B地点B'-3	鉢	〃	沈線	〃	
〃	112	B地点B'-5	深鉢	上半部	沈線、縄文	〃	
〃	113	B地点B'-5	鉢	〃	〃	〃	
〃	114	B地点攪乱	小形鉢	中半部	〃	〃	
第4図	115	B地点A'-3	壺	上半部	沈線	〃	
〃	116	B地点B'-3	深鉢	〃	沈線、縄文	〃	
〃	117	B地点B'-3	〃	中半部	〃	〃	
〃	118	B地点B'-3	鉢	上半部	沈線	〃	
〃	119	B地点A'-3	深鉢	〃	沈線3条、縄文	〃	
〃	120	B地点B'-2	壺	〃	沈線、連続刺突文	〃	
〃	121	B地点B'-3	深鉢	〃	沈線	〃	
〃	122	A地点A-5	〃	〃	沈線3条、縄文	やや軟	
〃	123	B地点B'-3	〃	〃	沈線	堅	
〃	124	B地点B'-3	〃	〃	〃	〃	
〃	125	B地点A'-3	〃	〃	沈線3条、縄文	〃	
〃	126	B地点B'-3	〃	〃	沈線	〃	
〃	127	B地点B'-2	〃	〃	沈線4条	やや軟	
〃	128	B地点A'-4	壺	〃	浮線網状文、沈線	堅	
〃	129	B地点B'-4	〃	中半部	浮線網状文、RL 縄文	〃	
〃	130	A地点A-6	〃	上半部	矢羽状区画文	やや軟	
〃	131	A地点A-6	〃	口縁部	矢羽状文、横位	〃	
〃	132	A地点A-12	小形鉢	〃	斜状沈線	堅	
〃	133	B地点B'-2	鉢	〃	外に接合痕	〃	
〃	134	B地点攪乱	深鉢	中半部	〃	〃	
〃	135	B地点B'-5	〃	上半部	接合痕4段	〃	
〃	136	A地点A-11	深鉢	口縁部	〃	やや軟	
〃	137	B地点B'-7	〃	〃	無文	堅	
〃	138	B地点A'-2	〃	〃	〃	〃	
〃	139	B地点攪乱	〃	〃	〃	〃	
〃	140	B地点A'-3	〃	〃	〃	〃	
〃	141	B地点B'-5	〃	〃	〃	〃	
〃	142	B地点B'-5	〃	〃	〃	〃	
〃	143	B地点A'-3	〃	〃	〃	〃	粗製
〃	144	B地点A'-3	〃	〃	〃	〃	
〃	145	B地点B'-3	〃	〃	〃	〃	
〃	146	B地点B'-3	〃	〃	〃	〃	
第5図	147	B地点B'-3	台付鉢	台部	沈線、縄文	〃	
〃	148	B地点B'-2	深鉢	底部	無文	堅	
〃	149	B地点B'-3	小形鉢	〃	〃	〃	
〃	150	A地点A-6	〃	〃	〃	〃	上げ底
〃	151	B地点B'-3	深鉢	〃	〃	〃	
〃	152	B地点B'-3	鉢	〃	〃	〃	

## 第Ⅳ章 結 び

今回の佐野遺跡の発掘調査は、県道宮村～湯田中停車場線の従前から行われてきた、拡幅改良工事の延長線上にあり、国史跡佐野遺跡公園に関わるため、道路拡幅・水路工事の方法が議論されてきた箇所であった。

遺跡の保護を前提として道路拡張工事が施工されたが、地元とすれば不満が残ったかもしれない。従って調査も破壊を最小限に進める前提で行われた。

A 地点については、調査面積が多かったので、成果が期待されたが、南小学校の校庭造成時に遺構面上まで破壊を受けていた。さらに登校口の石積みの施設があった。また、以前の校庭の排水の埋設管が道路側にあり、黒土層のある遺構面の残存が少なかった。

黒土を除くと、亜角礫が一面にあり、集石状の箇所が見られたが、雑然としており、人工的として認定するのが困難であり、土器や炭・骨・灰などの集中も見られず、土器片が散発的に見られただけである。(附表参照) 従って集石は数例を提示した。

B 地点は遺跡公園に接する箇所である。ここも道路工事や、前回の温泉を引くための、埋設工事などによって、遺構面が完全に破壊された箇所があった。南の交差点付近は、たび重なる掘削工事のため、破壊が激しく調査を断念した。

前述のごとく幅1.3m、深さ80cmまでの調査であったが、遺跡公園に接するため、土器が集中出土し、提示した遺物は、ほとんどこの箇所からである。

ここからは佐野式以前の土器から、いわゆる佐野式土器、大洞A式期に属すると思われる土器があり、新潟県をはじめ北陸や、関東との交流を示す土器が検出され、新知見と思われる土器も提示できた。

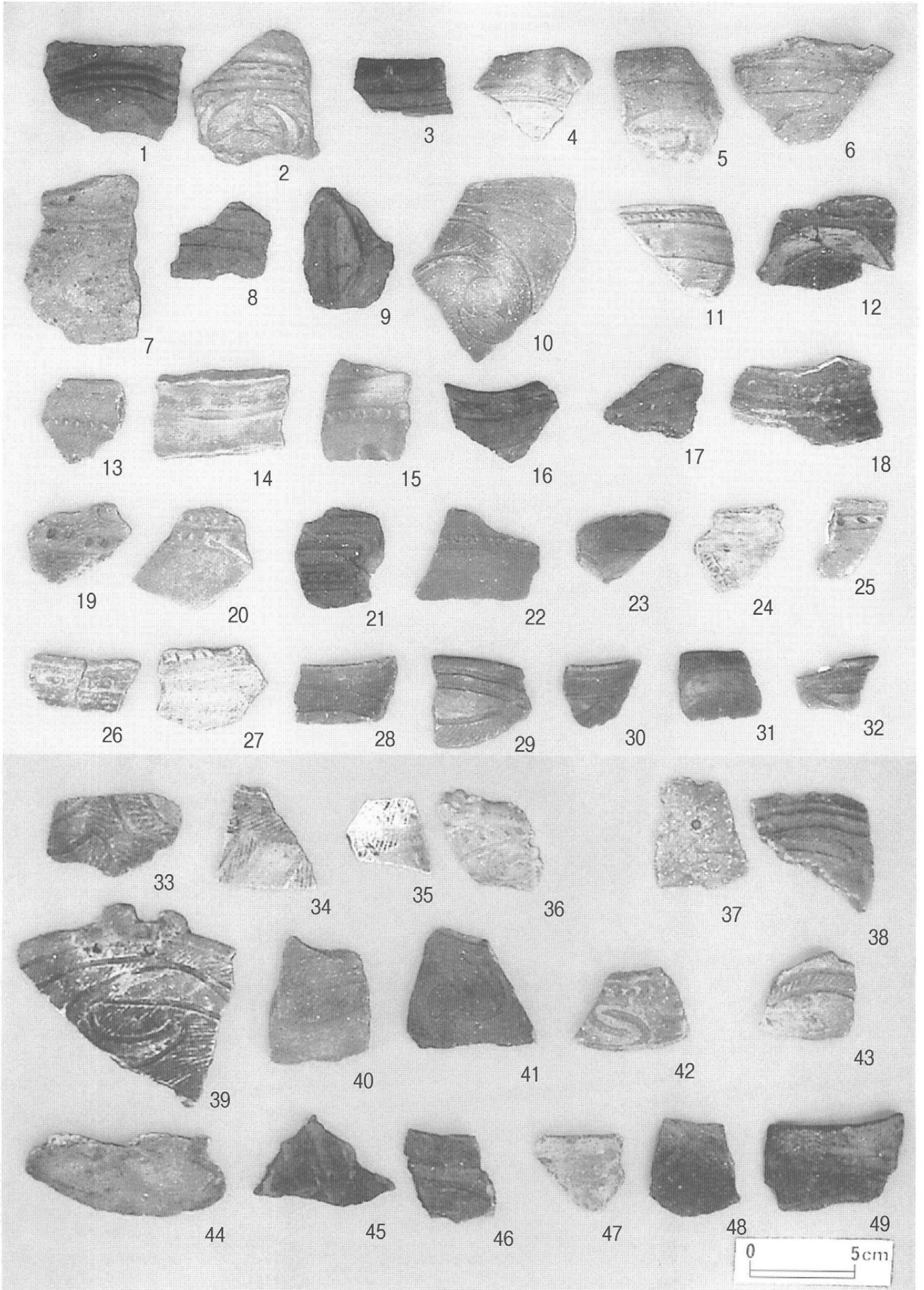
遺跡地は交通の要衝であり、早くから開発されたため、遺跡の全体像を把握するのに困難である。

遺構・遺物の発見や、遺跡の盛衰を語るには、まだ知られていない部分が多いと思われる。

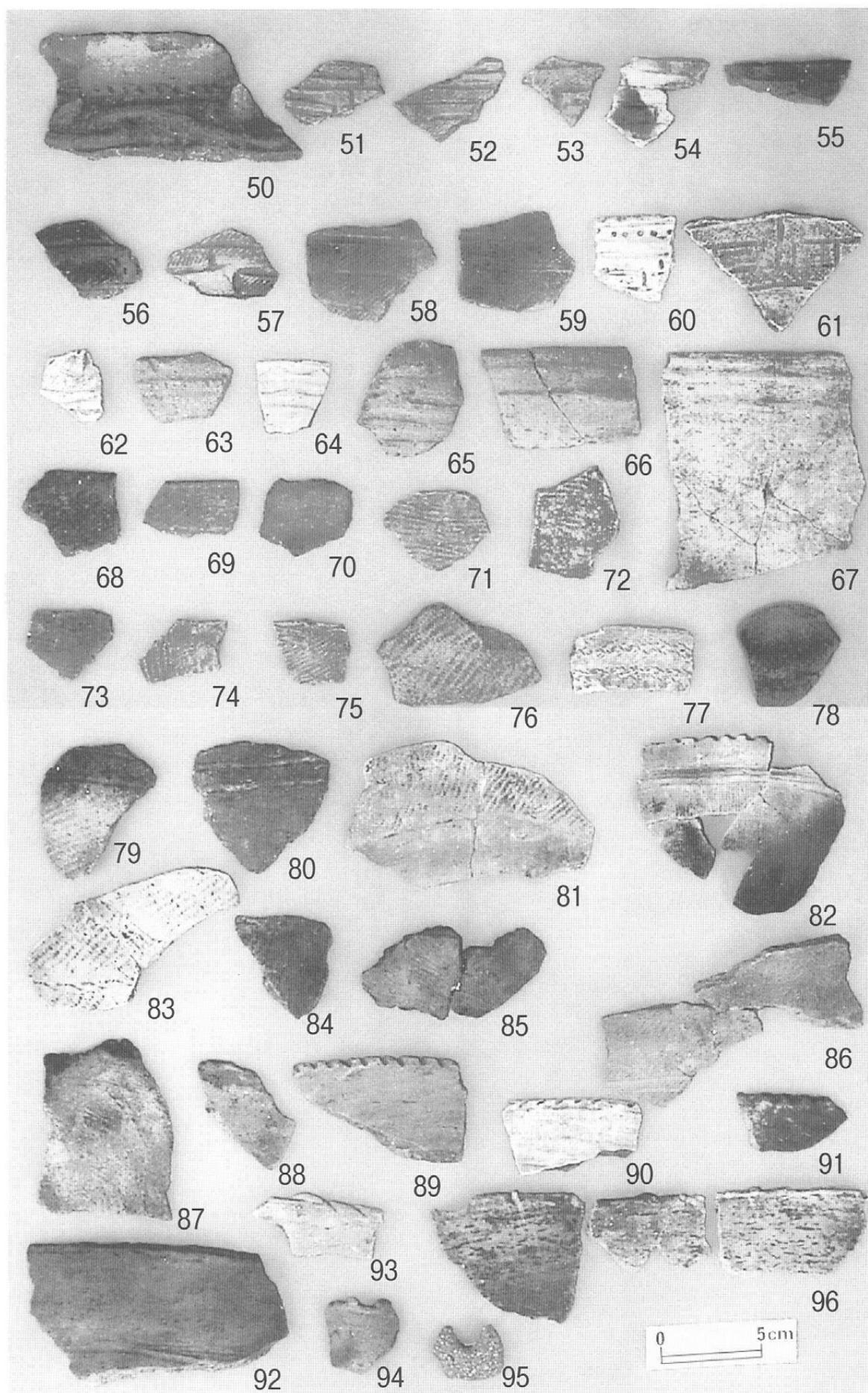
地域住民の協力によって、少しでもそれらの解明に前進できればと願われる。



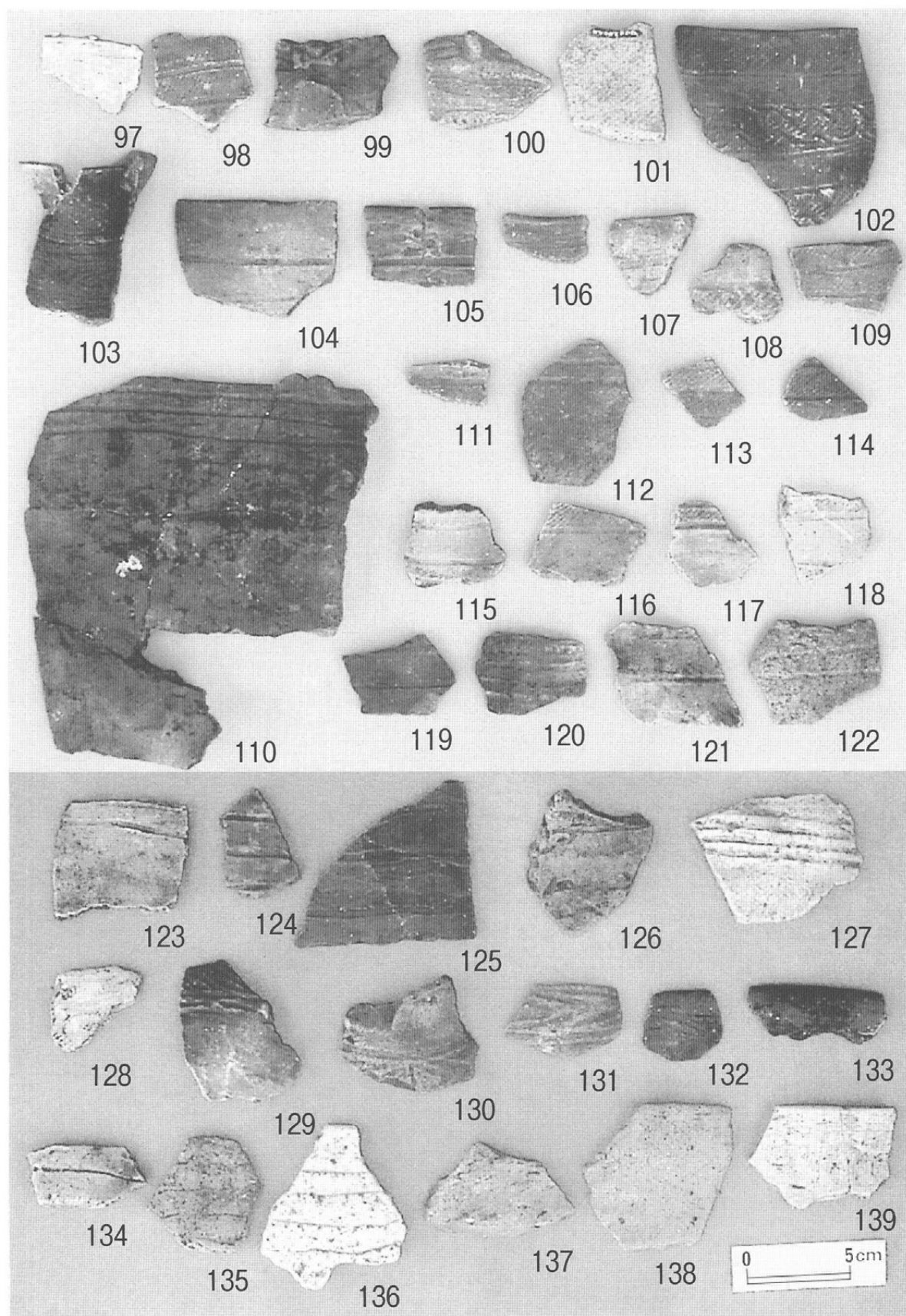
作業風景



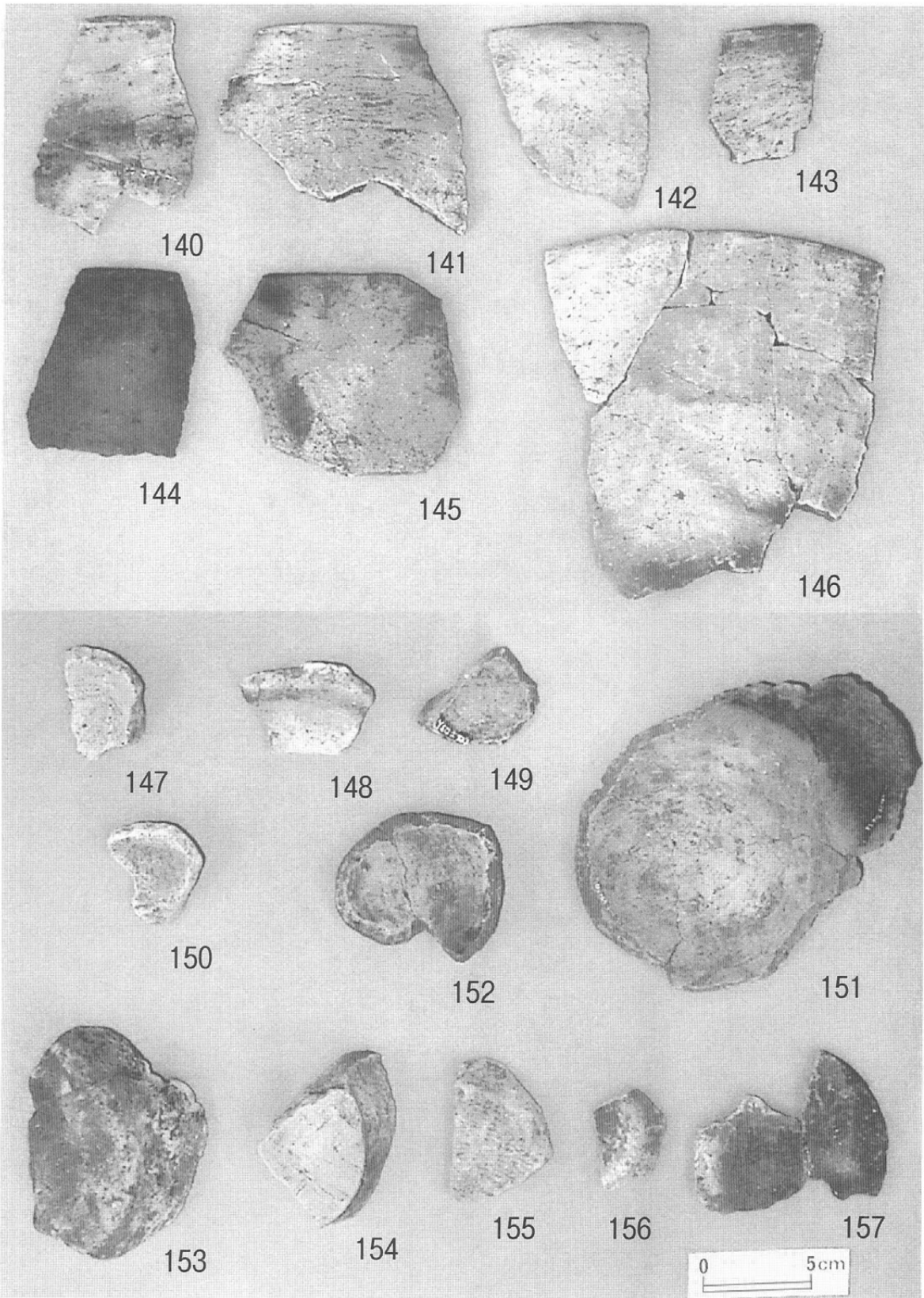




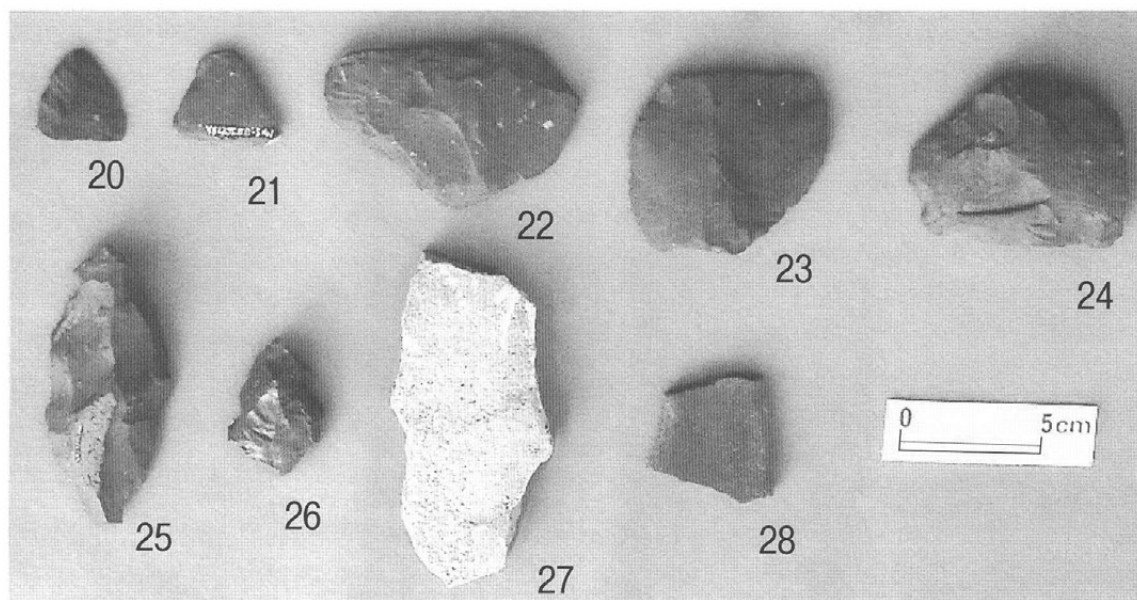
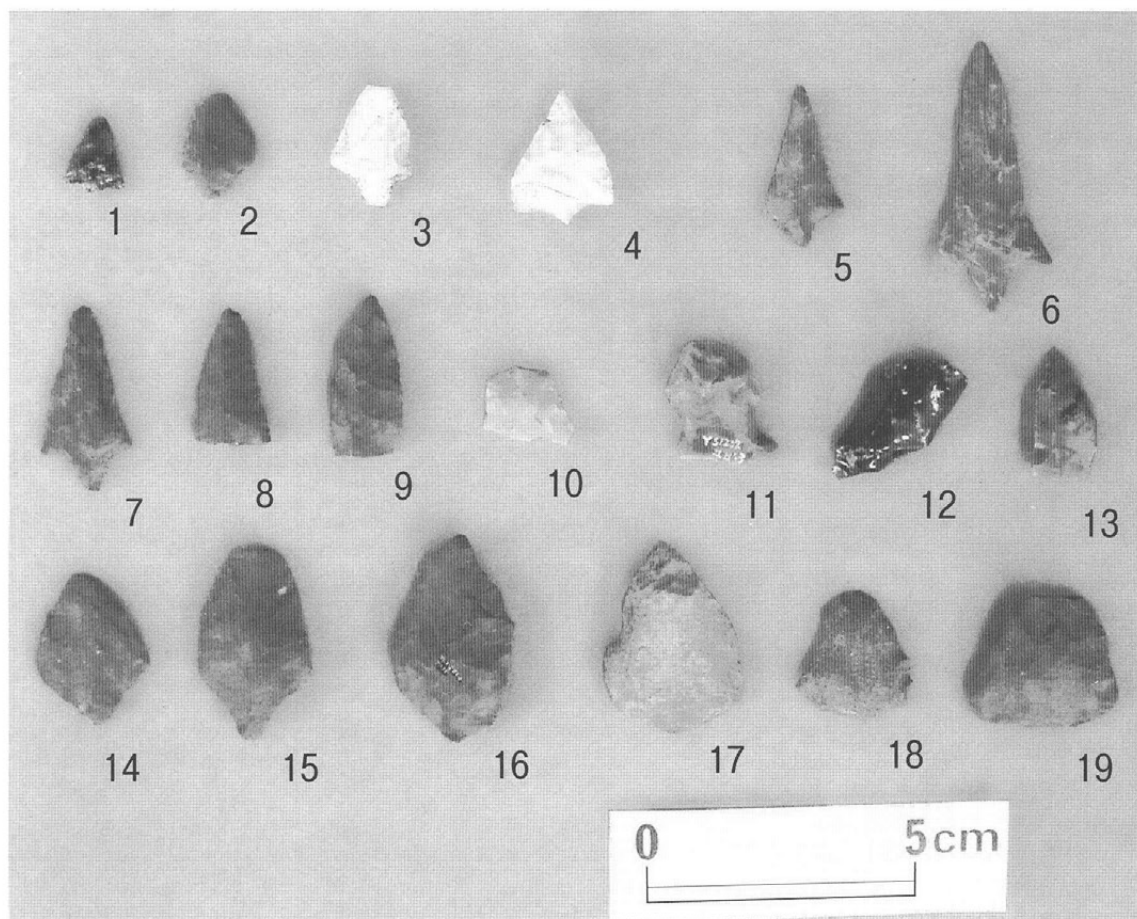




土器(3)



土器(4)



石器

引用文献・参考文献

- 1 山内清男 1930 所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末 『考古学』Ⅰ-3
- 2 八幡一郎 1932 信濃国下高井郡佐野の土器 『考古学』Ⅲ-3
- 3 小野勝年ほか 1953 下高井地方の考古学的調査 長野県教委 『下高井』
- 4 永峯光一 1955 千曲川沿岸地方における晩期縄文土器に就いて 『石器時代』
- 5 永峯光一ほか 1956 『信濃考古総覧』信濃史料第1巻下 信濃史料刊行会
- 6 桐原健 1962 信濃における縄文後晩期の所謂漁労文化に関する試論『信濃』Ⅲ-14-7
- 7 永峯光一ほか 1967 山ノ内教委『佐野』（長野県考古学会研究報告書3）
- 8 永峯光一ほか 1969 氷遺跡の調査とその研究 『石器時代』9  
(4・7・8 2005 『永峯光一著作選集』に収載 信毎書籍)
- 9 山ノ内町誌刊行会 1973 『山ノ内町誌』
- 10 関孝一 1975 佐野式土器文化について 『高井』31号
- 11 永峯光一 1976 佐野遺跡について 『高井』51号
- 12 田川幸生 1977 佐野遺跡 『日本考古学年報』28
- 13 佐野の歴史刊行会 1979 『佐野の歴史』
- 14 大原正義 1981 北信濃山ノ神遺跡出土の土器について 『信濃』Ⅲ33-4
- 15 鈴木克彦 1981 亀ヶ岡式土器 『縄文文化の研究』縄文土器監
- 16 永峯光一 1981 中部・北陸地方 『縄文土器大成』4 晩期
- 17 設楽博巳 1982 中部地方における弥生土器の成立過程『信濃』34-4
- 18 大原正義 1982 佐野遺跡 『長野県史考古学資料編(二) 主要遺跡 北・東信』
- 19 新潟県 1983 『新潟県史・資料編 1 原始・古代一』
- 20 三田史学会 1984 『亀ヶ岡遺跡』—青森県亀ヶ岡低地性遺蹟の研究—(復刻版)
- 21 石川日出志 1985 中部地方以西の縄文晩期浮線土器『信濃』37-4
- 22 檀原長則ほか 1985 土器・土製品 野沢温泉教委『岡ノ峯』
- 23 末永雅雄ほか 1986 『増補宮滝の遺跡』初版1944
- 24 潮見浩 1986 鉄・鉄器の生産 岩波講座『日本考古学3 生産と流通』
- 25 林謙作ほか 1986 岩波講座『日本考古学5—文化と地域性—』
- 26 綿田弘実・平林彰 1988 縄文晩期の土器 『長野県史考古学資料編(四) 遺構・遺物』
- 27 青木和明ほか 1988 『宮崎遺跡』—長原地区団体営土地改良区総合整備事業に伴う発掘調査報告書—
- 28 金子裕之 1989 安行式土器様式『縄文土器大観』4 晩期
- 29 藤沼邦彦 1989 亀ヶ岡土器様式『縄文土器大観』4 晩期
- 30 森嶋稔ほか 1990 『円光房遺跡』—長野県埴科郡戸倉町更級地区県営圃場整備事業に伴う幅田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告書—
- 31 戸沢充則ほか 1994 『縄文時代研究事典』
- 32 大塚達朗 1996 縄紋晩期研究の一断章—日下貝塚出土土器の再報告より—『画龍天晴』—山内清男先生没後25周年記念論集—
- 33 大貫静夫 1997 北方系刀子『考古学による日本歴史10・対外交渉』
- 34 渡辺明和 2000 『籠峯遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟県中郷村教委
- 35 橋口達也ほか 2003 炭素14年代測定法による弥生時代の年代論に関連して『日本考古学』16
- 36 縄文セミナーの会 2004 『晩期中葉の再検討・記録集』(第17回)
- 37 山本暉久・小泉玲子 2005 中屋敷遺跡の発掘調査成果—弥生時代前期の炭化米と土坑群『日本考古学』20号
- 38 梅木謙一 2005 弥生時代研究の動向『日本考古学年報56』2003年度版  
「佐野遺跡の発掘調査報告書」は別記

山ノ内町の埋蔵文化財発掘調査報告書 発行 山ノ内町教育委員会

- |    |                               |                     |
|----|-------------------------------|---------------------|
| 1  | 永峯光一ほか 『佐野』（長野県考古学研究調査報告書3）   | （縄文晩期）1967          |
| 2  | 金井汲次ほか 『上条遺跡調査略報』（縄文中期）       | （縄文中期）1967          |
| 3  | 金井汲次ほか 『第2次上条遺跡調査』（縄文中期）      | （縄文中期）1968          |
| 4  | 永峯光一ほか 『佐野遺跡範囲確認調査報告』（第3次発掘）  | （縄文晩期）1975          |
| 5  | 金井汲次ほか 『第4次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』     | （縄文晩期）1977          |
| 6  | 金井汲次ほか 『第5次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』     | （縄文晩期）1978          |
| 7  | 田川幸生ほか 『第6次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』     | （縄文晩期）1981          |
| 8  | 田川幸生ほか 『伊勢宮』                  | （縄文後期）1981          |
| 9  | 金井汲次ほか 『佐野遺跡第7次緊急発掘調査報告書』     | （縄文晩期）1982          |
| 10 | 檀原長則ほか 『上林中道南遺跡発掘調査報告書』       | （縄文草創期～平安時代）1985    |
| 11 | 田川幸生ほか 『佐野遺跡第8次緊急発掘調査報告書』     | （縄文晩期）1989          |
| 12 | 金井汲次ほか 『佐野遺跡第9次緊急発掘調査報告書』（未刊） | （縄文晩期）1990          |
| 13 | 金井汲次ほか 『佐野遺跡第10次緊急発掘調査報告書』    | （縄文晩期）1993          |
| 14 | 檀原長則ほか 『島崎遺跡試掘調査報告書』          | （縄文中期）1994          |
| 15 | 檀原長則ほか 『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』      | （縄文草創期～平安時代）1995    |
| 16 | 檀原長則ほか 『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』      | （縄文草創期～平安時代）1996    |
| 17 | 檀原長則ほか 『上林中道南遺跡試掘調査報告書Ⅳ』      | （縄文草創期～平安時代）2003    |
| 18 | 檀原長則ほか 『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅴ』      | （先土器（旧石器）～平安時代）2004 |
| 19 | 檀原長則ほか 『佐野遺跡第11次発掘調査報告書』      | （縄文晩期）2006          |
| 20 | 檀原長則ほか 『佐野遺跡第12次発掘調査報告書』      | （縄文晩期）2010          |

佐野遺跡発掘報告書抄録

ふりがな	さのいせき
書名	佐野遺跡Ⅻ
副書名	県道拡幅と水路工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	第20集
編集者	檀原 長則
編集機関	山ノ内町教育委員会
所在地	〒381-0401 長野県下高井郡山ノ内町大字平穏3352-1 ☎0269-33-3111
遺跡所在地	長野県下高井郡山ノ内町佐野区畑中ほか
遺跡県登録番号	No6502
遺跡位置	緯度36°43'44" 経度138°24'36"
遺跡標高	597～606m
調査期間	平成20年8月20日～9月24日
調査面積	約220㎡
調査原因	道路拡幅と水路工事に伴うもの
種別	包蔵地
主な時代	縄文時代晩期
主な遺構	集石など
主な遺物	縄文土器・石器
調査機関	山ノ内町教育委員会

## 佐野遺跡Ⅺ

——県道拡幅と水路工事に伴う発掘調査報告書——

発行日 平成22年2月15日

発行者 山ノ内町教育委員会

〒381-0401 下高井郡山ノ内町大字平穏3352番地1  
電話 0269-33-3111

印刷所 ほおずき書籍株式会社

〒381-0012 長野市柳原2133-5  
電話 026-244-0235



